新編中等國語讀本

新制版

卷三

375.9
Ka14
資料室

41445
教科書文庫
4
810
41-1938
200030
1700

昭和十三年一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用
實業學校國語科用

新編中等國語讀本

新制版

編者
金子元臣

資料室
375.9
Ka14

廣島縣高田郡吉栄村大字栄田九六五番地

廣島大學圖書之印

広島大学 教 34760 図書

卷三目次

一　吾人の皇室……永田秀次郎……一
二　御階の櫻（和歌）……六
三　春宵……夏目漱石……一〇
四　星の壽命……田中宗愛……一八
五　筍……薄田泣菫……二三
六　物のさとり……二七
　一、武道と畫道……（近世名家書畫談）……二七
　二、柿の種……（甲子夜話）……二八
　三、書奴を愧づ……（續近世畸人傳）……二九
　四、無藝……（先哲像傳）……三二

七　一水兵の日本海海戰……（東京朝日新聞）……三三
八　產土神と氏神……芳賀矢一……四〇
九　故郷の松……野口米次郎……四六
一〇　遙かに私の村が（詩）……尾崎喜八……五二
一一　眞淵と宣長……佐佐木信綱……五五
一二　友情……坪田讓治……六三
一三　野口英世……六九
一四　比叡の鳥……高濱虛子……八一
一五　兒獅子……マーデン……八六
一六　バクダード旅行記……笠間杲雄……九二
一七　菩提樹の花蔭から（書簡）……吉江喬松……九九
一八　椰子の實（詩）……島崎藤村……一〇二

一九　犍陀多……芥川龍之介……一〇四
二〇　武士道……辻善之助……一一五
二一　膽力の養成……嘉納治五郎……一二一
二二　鬼作左……新井白石……一二七
二三　人の香（書簡）……竹越與三郎……一三四
二四　初秋海濱記……豐島與志雄……一三八
二五　滿洲國の我が移民村……岸井壽郎……一四六
二六　歌話……一五五
一、とりゐ阪……中村秋香……一五五
二、あがたの宿……同……一五六
三、沖つ白波……菅茶山……一五七
二七　厨子王その一……森鷗外……一五九

新　筍（荒木十畝筆）

五　筍

二八　厨子王　その二……森　鷗　外……一六八

附錄　字音假名遣一覽

廣島大學圖書之印

新編 中等國語讀本（新制版）卷三

一　吾人の皇室

吾人の皇室は吾人の皇室である。決して他人の皇室ではない。他所の皇室ではない。故に吾人ばかりがこれを讃美したい。吾人ばかりがこれを尊崇したい。そして他所の他人などには斷じて手をも觸れしめるものではない。指をもさしめるものではない。

夏の諺に曰はく、「我が王遊ばずんば、我何を以てか休まん。

我が王遊ばずんば云云　孟子、梁惠王章句下に出づ。

情緒

情誼

狃

同胞

我が王豫しまずんば、我何を以てか助からんと。かくの如くに我が王、我が王と繰り返していふ所に、無限の情緒が含まれてゐる。

吾人の皇室と吾人國民との間には、君臣の義の嚴として存することはいふまでもないが、それと同時に、實に父子の情誼がある。その子より見たるその父は、非常に尊く且偉いものである。そして何となく威嚴があつて、狃れがたい。それにも拘らず、又非常に親しく懷かしくして、一日と雖も離れてゐることが出來ない。實に吾人九千萬同胞の精神に宿る吾人の皇室なるものは、最も尊嚴にして且最も親愛なるものである。

キング・ジョージ　英國王ジョージ五世。（西暦一八六五年―一九三五年）

ロイド・ジョージ　英國現代の大政治家。自由黨の首領。西暦一八六三年生まる。

詔諛

ジョージ五世

ロイド・ジョージ

英國人は曰はく、「英國に二人のジョージあり。キング・ジョージ及びロイド・ジョージこれなり」と。かくの如く皇室とその臣僚とを併稱するが如きは、我が國民性に於いては實に堪へ難き不快の言葉である。

吾人の皇室は尊嚴である。隨つてこれを英國人の如くに無造作に他の物と比較併稱するは、吾人の感情に於いて到底忍びがたきことである。吾人のこの感情は決して詔諛ではない。又理性

批判

孔子に叱られる　論語、子路篇に「孔子曰、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。」

を滅却したものでもない。實に自然の性情の流露である。何人と雖もその父を以てこれを他人に比較し、批判指摘して論難するを忍ぶことが出來ようか。もしかくの如き行爲を以て直なりとなす者があつたならば、必ず孔子に叱られるであらう。

吾人は又ある守舊者流の如く、吾人の皇室の尊嚴なる方面のみを知つて、親愛なる方面を遺れ、門を鎖し、簾を垂れ、障子を閉めて、我が親愛なる父を仰ぎ見るの機なからしめるが如きことは、吾人の熱烈なる愛情の到底堪へ得ざる所である。

吾人の皇室は吾人の皇室である。尊嚴にして狃るべからざると共に、また親近にして離るべからざるものである。故に吾人は啻にこれを公儀の上に仰望するのみならず、吾人國民の經濟生活、文化生活の上に、常に吾人の父に親近することのいよいよ深からんことを希望して止まぬものである。

仰望

永田秀次郎　貴族院議員。兵庫縣の人。青嵐と號し俳句をよくす。明治九年七月生まる。

吾人は茲に大なる自尊心を以て、吾人の皇室を讃美する。何となれば、吾人九千萬同胞の自尊と光榮とは、實に吾人の皇室のいよいよ尊嚴を加へることによりてのみ、最も簡潔に表現せらるるものなるを確信するが故である。

（永田秀次郎―平易なる皇室論）

孝明天皇　明治天皇の御父。第百二十一代の天皇。

平野國臣　勤王家。通稱次郎。福岡藩士。元治元年斬らる。（一二五二四年）

天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ　國臣

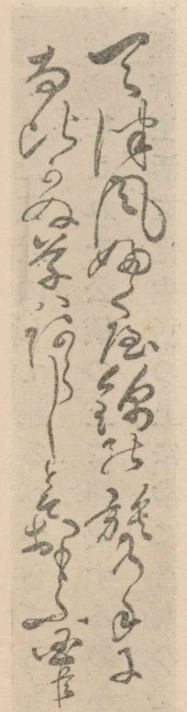
二　御階の櫻

孝明天皇御製

ほことりてまもれもののふ九重の
御階のさくら風さわぐなり

平野國臣

大君にささげまつりしわが命
いまこそすつる時は來にけれ



平野國臣筆

久阪通武　吉田松陰門下の勤王家。通稱義助、字は元瑞。元治元年七月京都に自殺す。（一四九九年—一二五二四年）

賴三樹三郎　勤王家。名は醇、鴨厓と號す。山陽の第三子。安政の大獄に斬らる。（一四八七年—一二五一九年）

吉田松陰　勤王家。通稱寅次郎、名は矩方。長州藩士。安政の大獄に刑せらる。（一四八一年—一二五一九年）

梅田雲濱　勤王家。通稱源次郎。若狭の人。安政の大獄に捕へられ獄死す。（一四七六年—一二五一九年）

久阪通武

いくたびもくりかへしつつ大君の
みことしよめば涙こぼるる

賴三樹三郎

浮雲のおほふ姿はかはれども
よろづ代おなじ天津日の影

吉田松陰

おやを思ふこころにまさる親心
けふのおとづれ何ときくらむ

梅田雲濱

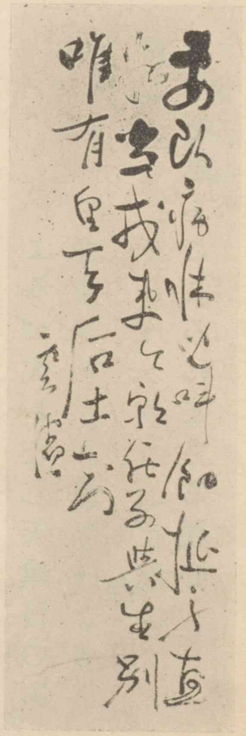
君が代をおもふ心のひとすぢに
わが身ありとは思はざりけり

僧月照

大君のためには何かをしからむ
さつまのせとに身は沈むとも

高山彦九郎

我を人としろしめすかやすめらぎの



梅田雲濱筆

僧月照
勤王家。京都清水寺成就院の僧。安政五年十一月幕史に追はれ西郷隆盛と薩摩の海に投ず。（二四七三年—二五一八年）

高山彦九郎
名は正之。上野國の人。寛政三奇人の一人。寛政五年六月筑後久留米に自殺す。（二四〇七年—二四五三年）

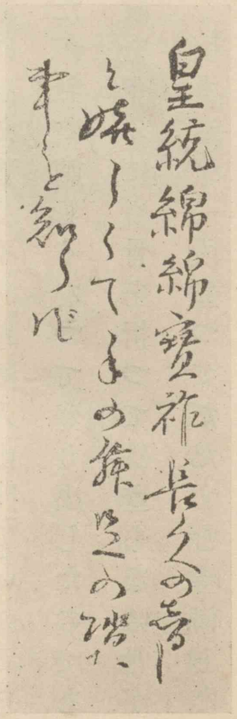
たまのみ聲のかかるうれしさ

徳川齊昭

いまよりは心のどかに花をみむ
ゆふぐれつぐる鐘をきかねば

佐久間象山

梓弓ま弓つき弓さはにあれど
この筒弓にしくものあらめや



高山彦九郎筆

皇統綿綿實祚長久の事と嬉しくてまの鐘聲の響きと聞くべし

徳川齊昭
水戸藩主。烈公と謚す。萬延元年八月薨ず。（二四六〇年—二五二〇年）

佐久間象山
名は啓、修理と稱す。信州松代藩士。開國論を唱へし碩儒。元治元年七月京都にて刺さる。（二四七一年—二五二四年）

おぼろ（朧）

會うて（會ひて）

葷酒

三　春宵

山里の朧に乘じてそぞろあるきする。觀海寺の石段を登りながら、「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に會ふ用事もない。會うて雜話をする氣もない。ふいと宿を出でて、足の向く所にまかせてぶらぶらするうち、ついこの石段の下に出た。暫く「不レ許ニ葷酒入ニ山門一」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも骨を折つては登らない。骨が折れる位ならすぐ引き返す。一段登つてたたずむ時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として

鎌倉五山　建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙の五禪刹をいふ。

登つて（登りて）

草枕繪卷　觀海寺（穴山勝堂筆）

わが影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だからまた登る。かうして、余はとうとう上まで登りつめた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊に行つて、所謂五山なるものをぐるぐる尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、矢張こんな風に石段をのそりのそりと登つて行くと、門内から黄色な衣を著た頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下りる。

鋭い（鋭き）
問うた
洒落
立つて（立ちて）
庫裏

すれ違つた時、坊主が鋭い聲で「何處へお出でなさる」と問うた。余は只「境内を拜見に」と答へて同時に足を停めたら、坊主は直ぐに「何もありませんぞ」といひ捨てて、すたすた下りて往つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振り立て振り立て、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間、かつて一度も振り返つたことはない。成程禪僧は面白い。きびきびしてゐるなと、のつそり山門を這入つて見ると、廣い庫裏も本堂も、がらんとして人影はまるで無い。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取り扱つてくれたかと思ふと、何となく

氣分が晴晴した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪のゼの字もいまだに知らぬ。只、あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

絶句
甃んで（甃みて）
をかつつじ（岡躑躅）

「仰數春星一二三」の句を得て石段を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。卽座にやめにする。

石を甃んで庫裏に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何處やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも住んで居るらしい。氣のせゐか廂のあたりに白いものが點點と見

並んで。（並びて）

大津繪　滋賀縣大津市追分にて賣る一枚摺の浮世繪。江戸時代、浮世又平に始まる。

大津繪

唆

撞木

覇王樹

える。糞かも知れぬ。

雨垂落の處に妙な影が一列に並んでゐる。木とも見えぬ。草では無論ない。感じからいふと、大津繪の鬼の念佛が、念佛をやめて踊を踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく並んで踊つて居る。朧夜に唆かされて、鉦も撞木も奉加帳も打ち棄てて、誘ひ合はせるや否やこの山寺に踊に來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹（さぼてん）である。高さは七八尺もあらう。絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、

繋

廂

滑稽

木蓮

柄の方を下に、上へ上へと繼ぎ合はせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのか分らない。今夜のうちにも廂を突き破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意にどこからか出て來て、ぴしやりと飛び付くに違ない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちに段段大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子との連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹はたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。

石甃を行き盡して左へ折れると、庫裏へ出る。庫裏の前に大きな木蓮がある。殆ど一抱もあらう。高さは庫裏の屋根を

拔いて（拔きて）
隙いて（隙きて）
簇

拔いてゐる。

見上げると、頭の上は枝である。枝の上も亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通、枝がああ重なると、下から空は見えぬ。花があれば猶見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝との間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂すほどの細い枝を徒らには張らぬ。

花さへ明かである。この遙かなる下から見上げても、一輪の花ははつきりと一輪に見える。その一輪が、どこまで簇がつて、どこまで咲いてゐるか分らぬ。それにも關らず、一輪は遂に一輪で、一輪と一輪との間から薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。白いのは寒過ぎる。專らに白いのは殊更に人の眼を奪ふ巧が見える。木蓮の色はそれではない。極度の白さをわざと避けて、暖かみのある淡黃に、奥ゆかしくもみづからを卑下してゐる。

余は石甃の上に立つて、このおとなしい花が累累とどこまでも空裏に蔓るさまを見上げて、しばらく茫然としてゐた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

木蓮の花ばかりなる空を見る

といふ句を得た。

どこやらで鳩がやさしく鳴き合うてゐる。（夏目漱石―草枕）

合うて（合ひて）
夏目漱石　文學者。名は金之助。東京の人。東京帝國大學英文科出身。同大學講師。大正五年十二月歿す。（一八五二七年―一九一六年）

四　星の壽命

友人と散歩しながら「今空に見えてゐる星の數はどの位あるだらうか」と尋ねると、十萬とか百萬とか答へるのが普通である。そんなに澤山肉眼で見える星はありはしない。餘程眼のよい人でも高高三千とは見えない。南天の方の見えにくい部分を加へても六千には上らない。その明るさによつて、一等星から六等星まで等級が付けてある。明るいからといつても大きいわけでなく、むしろ遠近によるものである。

白樂天の詩に、

白樂天　唐の詩人。名は居易、樂天はその字、香山と號す。官刑部尚書に至る。（西暦七七三年―八四七年）

駐　　賽

「君見ずや春明門外天明けんと欲し、喧喧たる歌哭半ば死生す。遊人馬を駐めて出づるを得ず、白轟素車路を爭うて行く」。

天體の觀測

といふのがあるが、これはどういふ意味かといふと、夜が明けさへすれば、死者の柩を送るもの、子を生みて神に賽する者が雜沓して、歌ふやら、哭するやら、喧騒を極めて、容易に通り抜けることが出來ぬといふ光景をいつたものであるが、かかる

無常

輻射

地球上の出來事は、やはり天界にもあつて、無常の鐘が響き渡るや、光が次第に微かになつて遂に消えてしまふ星もある。これ等は勿論、天空の戸籍面から削らるべき運命にある。さうかと思ふと、今まで肉眼にも見えなかつた程の小さい星が、次第に光を増して一等星位までも昇格するのもある。こんな星を新星といつてゐる。

恒星の色は白、黄、橙、赤などあるが、白色のものは最も普通で、これは若い星であり、老年のものは稀ではあるが、赤色である。我が太陽は初老の星の部に屬してゐる。

處で、靜かに思ひめぐらしてゐると、我我の太陽の壽命が心配になる人もあらう。我が太陽は毎日輻射線を發散して

樂觀

質量を減じつつあるから、遂には光が出せないやうになるだらうと思ふのも、それは當然である。然るに、その計算が甚だまちまちで、數千億年といふのが先づ相場になつてゐるが、これとてもはつきりさうと定まつたわけではない。早い話が、地球の壽命でさへ、地質學者と天文學者によつて、隨分開きがあるからである。近頃樂觀説を出す學者もあり、否否そんな取越苦勞は御無用であるといふ人もある。

かく恒星が生まれては死する有様は、一見吾人の生涯と似通つてゐるが、抑、生前はどうであつたか、又死後はどうなるだらうかといふ問題は、一生涯のうち一度は、眞面目に誰しもが考へるべき大問題である。

併し生まれるからには何か由つて來るところがなくてはなるまいし、死してもそれが終であるとは思へない。恰も秋になると野原の草が枯れ萬木蕭條としてゐるが、春になると再び生き生きとした芽がふいて來るやうに、枯れては生じ、生じては枯れ、かくして永久に續くのではあるまいかと信じてゐる。（田中宗愛）

蕭條

田中宗愛　理學博士。京都帝國大學講師。東京帝國大學農科大學出身。大阪の人。明治二十四年生まる。

太陽があれだけ大きな力を持ちながら、出る度毎に何かしら含羞んで居るやうにも見えるのはどういふわけであらう。最も偉大なものは最も謙遜である。朝日が私の胸を直射する時、私の心は一時に覺醒する。いろいろな俗念や憤や、恨や愚痴や疲勞や倦怠は、速かに平癒する。心の病に利く靈藥は朝日である。（佐藤紅綠）

五　筍

孟宗

私の故郷の家には地續きに小さな孟宗竹の藪があり、それから少し奥まつた邊に、やや大きい眞竹の藪があります。櫻の花が咲いて、空に思ひがけない春雷がごろごろ鳴ると、それをきつかけに、海では櫻鯛が網に上ります。その頃になると、孟宗竹には、あつちこつちに、もくもく土がもち上つて、赤茶けた産毛を生やした筍がひよつこり頭を擡げかかります。

上つて（上りて）

擡

「ああ筍が……」

私はそれを見つけた瞬間、いひ知れぬ歡喜に胸をふるは

鰻　擽　のぞいて（のぞきて）

せたものです。筍は私にとつては、狗ころと同じやうに、短い産毛を生やした動物だつたのです。私は草履をはいたまま、垣のこはれから鰻のやうに藪のなかに滑り込みましたが、あつちでもこつちでも、筍の縮れつ毛の頭を見つけると、自分の踏んでゐる草履の下からも、今にもむつくり赤土がもちあがりさうな氣がして、足の裏が擽つたくて、たまらなかつたのを覺えてゐます。私はそこらの草を搔き集めて來て、一つかみづつそれを筍の上に被せてやりました。かうすれば、通りがかりに竹藪をのぞいて見る惡戯つ兒の狡い眼からも遁れられるし、また日光をぢかに受けないですむので、中味の肉がながく柔かさを保つことが出來るしするから

愛撫　脊髓

であります。

それからは、私は毎日幾度かこつそり藪へ滑り込んでは、人知れずどんなに筍の生長を樂しんだことでせう。親にかくれて物置小屋の狗ころを愛撫するのと同じ心持です。狗ころが見る度に肥つて行くやうに、筍もその度に寸を伸ばして行くやうに思はれました。實際筍の生長ほど目覺ましいものはありません。午前と午後とでは五寸以上も身丈が違つてゐるやうな事もありました。私はそんなことをしてはならないと思ひながら、時時抑へきれない欲望に驅られて、筍の背を手のひらで撫で廻してみたり、又は肩へ手をかけて一寸搖ぶつてみたりしました。筍は強健な脊髓をもつ

てゐるやうに、びくともしませんでした。

「大きくなれ、大きくなれ」

私はかういつて、土に生えたこの狗ころに挨拶しながら、またもとのやうに青草をその上に被ぶせかけて置きました。

やがて筍掘りの時節が到來します。

私は筍の毛皮を損ねないやうに、周圍の土を掘り下げて往きました。掘つても掘つても筍のお尻が見えないので、思の外大きいのにびつくりすることも、度度ありました。

（薄田泣菫―太陽は草の香がする）

薄田泣菫　詩人、隨筆家。名は淳介。岡山縣の人。明治十年五月生まる。

六　物のさとり

一、武道と畫道

宮本武藏、ある時主君より命ありて、君の面前にて達磨を畫けるに、その出來甚だ拙劣なりければ、その日は止みぬ。武藏夜に入り衾を被きながら、それこれと工夫して、ふと夜半に起きあがり、燈下に筆を援つて揮灑するに、頗る意に適ひて、その出來榮え拔群なり。その時、武藏門人に向つていひけるは、「わが畫いまだわが刀術に及ばず。その故

宮本武藏自畫

宮本武藏　江戸初期の劍客。二刀流劍法の祖。名は政名、二天と號す。播磨の人。後肥後の細川侯に仕ふ。正保二年歿す。（一二四二年―一二三〇五年）

揮灑　榮え。

天海僧正　天台宗の僧。南光坊と號す。會津の人。家康に信任せらる。寛永元年東叡山寛永寺を創建す。同二十年寂す。（一一一九六年―一六三〇三年）

猷廟　徳川家光のこと。

は、主君の仰なればひたすらよく畫かんと思ふ心よりして却つて甚だ拙劣なるものとなれり。今は我が刀術の奥義を以て畫きたれば、かかる適意の作を得たり。そもそも我が刀術は、太刀おつとりて立ち出づる時は、我もなく敵もなく、天地を破る見地なり。故に他に恐るるところなし。さてさてわが畫はわが刀術の足元にもよらず」と語りきとなん。

（近世名家書畫談による）

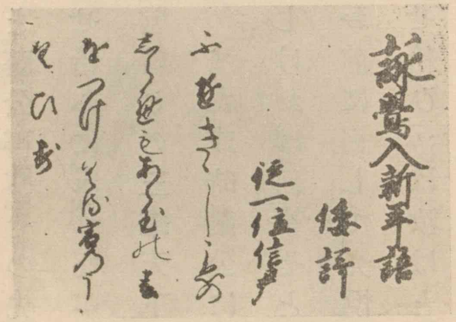
二、柿の種

天海僧正は長壽の人なり。一日猷廟の御前にて柿を賜ふ。喫してその核子を懷にするを御覽ぜられ、「僧正何にするぞ」と問はせられければ、「持ち歸りて植ゑ候ふ」と答ふ。仰に「高年の人無益のことに」とありければ、天海申すは、「兵馬の權を掌らるる御方は、かかる性急なる思召然るべからず。ほどなくこの柿の生立ち上覽にそなへん」とて退出せり。年を經て僧正柿を多く器に盛りて獻上す。猷廟「いづくの産物ぞ」と御尋ねあるに、「さ候ふ。これは先年拜受せし柿の核子の成長して實れるところなり」と申し上げければ、上を始め奉り、その席にあり合ふ諸人歎服せざるはなかりきとなり。（甲子夜話）

詠鷺入新年語　倭謌　從一位信尹

ふゆきゝしこゑのしらべもあら玉の春をつげくる宿のうぐひす

核子



近衛藤公筆

三、書奴を愧づ

近衛藤公　近衛信尹。關白前久の子。能書の譽高し。慶長十五年薨ず。（二二一年—二二七〇年）

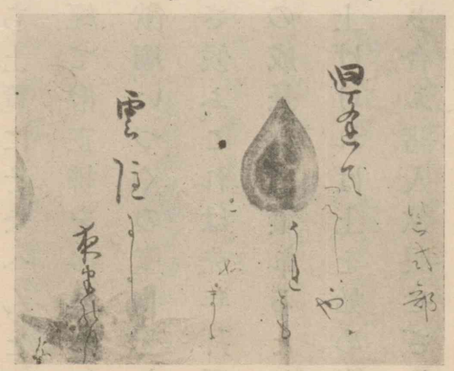
本阿彌光悅　江戸時代の工藝家。本姓多賀氏。京都の人。刀劍鑑定に長じ、又書畫に巧なり。寛永十四年歿す。（二二一八年—二二九七年）

八幡の坊　松華堂ともいふ。

紫式部
廻逢て見しやそれともわかぬまに雲隱にし夜半の月かな

或時、近衛藤公、光悅にたづね給ふ、「今天下に能書といふは誰誰ぞ」と。光悅答ふ、「先づ——。さて次は君、次は八幡の坊なり」と。藤公再び「その先づとは誰ぞ」と仰せ給ふに、「恐れながら私なり」と申す。當時この三筆天下に名あり。

また或時、藤公にはかに光悅を召しければ、何事ぞとあわてて參るを、お前に召して、光悅が手をきと援らせ給ひ、「汝は汝は」と詞もあららかに仰せ給ふに、光悅思ひ寄らざることなれば、「御意にたがひし覺えは侍らず」と恐る恐る申しければ、公打ち笑はせ給ひ、「何



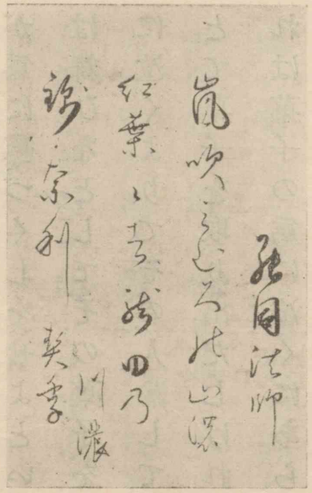
本阿彌光悅筆

松華堂　江戸初期の書畫の大家。石清水八幡の瀧本坊に住す。名は昭乘、本姓中沼氏。奈良の人。寛永十六年歿す。（二二四四年—二二九九年）

能因法師
嵐吹みむろの山の紅葉々は龍田の川の錦なりけり

としてかくはよく書くぞ」と戯れ給ひき。

又光悅、或時松華堂とともに藤公に參り、夜ふくるまで御物語申しし時、今古の書家を品評し給ひ、「今の人は古人の風を學んでその心を學ばず。徒らにその姿をのみ眞似るを書奴といふ。書奴の名を得んよりは各、我が好みにまかせて一家を成すべし」と宣ふ。二子、「僕等も常に思ひし所なり。明日御前にして書を戰はしめん」とて歸りぬ。約の如く明くる日二子參り、公の御書とならべて各、一風を書き出せるをくらべ合ひて見けり。今も近衛



松華堂筆

流、光悅流、瀧本流とて世にもてはやさる。（續近世畸人傳）

四、無藝

闇齋五六歲の時群童と遊ぶ。ある人菓子を出だし「兒童わが爲に藝づくしをせよ」といひければ、いづれも或は歌ひ或は舞ひなどして、その菓子を乞ひ得たり。闇齋ひとり只大いに泣く。よりてその人諭していふ、「やめ、やめ。汝にも與ふべし」とて菓子を取り出だしければ、闇齋首を掉りていふやう、「われは菓子の爲に泣くにあらず。人皆その能くする藝あり、然るにわれひとりなし。この故に泣く」といふに、その人歎異して、「これ凡童にあらず、後生畏るべし」といひけりとぞ。

（先哲像傳による）

闇齋　山崎氏、名は嘉。京都の人。程朱學者。後垂加神道を唱ふ。天和二年九月歿す。明治四十年正四位を贈らる。（一二七八年―一二三四二年）

七　一水兵の日本海海戰

日本海海戰　明治三十八年五月二十七八兩日の日露の海戰。

艦長　海軍大佐竹内平太郎。

冗談

酒保

みんな（みな）

愈〻戰が始まるといふその直前、俺達は甲板に集合した。俺達の前に立つた艦長の顏は悲壯そのものだつた。竝み居る將校達の眼も既に血走つてゐた。昨日まで冗談を飛ばしてゐた戰友達も、眼に口に決死の色を浮べてゐた。固く結ばれた艦長の唇が開いて、腹の中から絞り出すやうな聲が、日本海の怒濤を壓へつけるやうに迸つた。

「愈〻戰鬪だ。お互にしつかりやらう。酒保には食料がうんとある、みんな腹一杯に食へ」。

一言一句が我我の胸をひきしめる。艦長の切切の訓示は

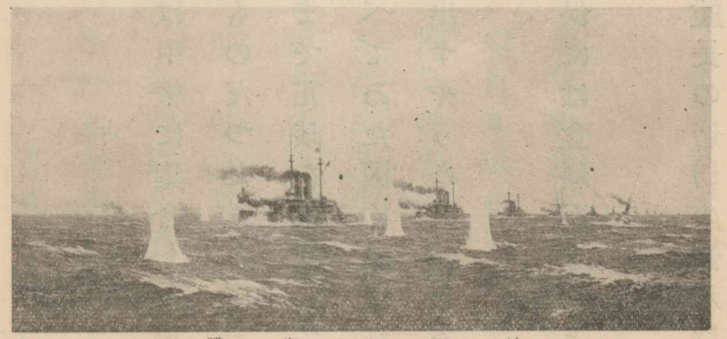
なほも續いた。

「それからみんな大事な戰だ。晴著に著替へろ。書置をしたいものはせよ」。

二度と聞けない言葉である。誰も彼もが死よりも深い沈默だつた。だが一人としてうなだれてゐる者はなかつた。みんな元氣だつた。訓示が終ると、俺達はこのはち切れる意氣を軍歌に爆發させた。敵艦はもう見えてゐる。戰は近い。

爆發

俺達は直ぐに服を著替へた。下著か



日本海海戰

綺麗

千人針　千人が一針づつ縫つたもの。

部署

俺も云云云　本文の筆者は當時巡洋艦日進の一等下士官として射手を勤めたり。

吐いて（吐きて）

ら上衣まですつかり綺麗な死裝束だ。俺は故鄕を立つ時、出征を祝つてくれた親達が、村を一軒づつ驅け廻つて作つてくれた千人針の袋を、今更に腹に固くしばり著けた。この中には三十幾つかのお守が入つてゐた。毎日のやうに全國民から送られたお守だ。

戰は必ず日本のものだ。

みんな部署に就いた。俺の右には戰友の兵頭がゐる。兵頭はもう照準臺に上つてゐた。俺も續いて照準臺に上つた。望遠鏡を目にあてると、敵艦が幾つも幾つも黃色い煙突から煙を吐いてゐた。

あつ、煙が上つた。續いてどーんと音が聞えた。敵は火蓋を

三笠　當時の聯合艦隊の旗艦。

西郷從道　侯爵。元帥。海軍大將。舊鹿兒島藩士。明治三十五年七月薨ず。（一五〇三年—一二五六二年）

晄

切つたのだ。だが三笠はまだ撃たなかつた。三笠が撃てば直ぐに俺達も撃てるのだ。三笠はまだ撃たぬ。何故撃たぬのだ。早く撃てばいい。俺の背後には砲彈運搬員の恨めしげな眼が燒き著けられてゐるのだ。

日清戰爭の後のことだつた。砲術學校の卒業式の時、當時海軍大臣だつた西郷從道侯が來られて、

「お前達は大した戰爭をしたことがないのだ。大砲に向つたら敵の大砲の煙を見ろ。煙が渦卷いて見えたら自分の艦が敵艦に晄はれてゐるのだ。渦のない時は外の艦を撃つてゐるのだ」といふ訓示をされたことがあつた。照準臺に上つて望遠鏡を手にし、今か今かの一彈を籠めて、全身神經にな

搖

り切つてゐた俺は、この時ふとこの言葉を思ひ出してゐた。續けざまに撃たれる敵の砲煙は、みんな渦を卷いてはゐなかつた。間もなく三笠が撃ち始めた。あつ三笠が撃つた！目指すは敵の旗艦だ。遂に我が艦にも「撃方始め！」の命令が出た。

敵艦の距離はどうか。先づこれを測らねばならぬ。一發二發三發、彈丸を撃つては測つて行くのだ。もう俺は必死だつた。うまく敵艦に命中したやうな氣がした。

あたるぞ！

胸は躍つた。その間もなくだつた。艦の激しい動搖。前甲板がすつ飛んだらしい。左腕がぴしつとしびれた。敵の猛撃だ。

蒙

滲

鬱陵島　朝鮮江原道東方七十浬の日本海中にあり。鬱―欝

やられたと思つたが俺はやられてゐなかつた。

ああ敵の砲煙はこの時渦を卷いてゐた。覘はれてゐる。續いて何發の敵彈を蒙つたか？俺に分るのは、ただ背後にゐる砲員が次第に少くなり、顏ぶれが變つて來てゐることだけだつた。下川水兵も脇腹をやられたらしく、血が滲み出てゐた。

「身方は減つたのだ！しつかりせよ」。

俺は夢中でどなりつけた。下川水兵は遂に最後まで頑張つて倒れた。數時間の戰鬪――それが俺達には十分位の出來事のやうに思へてならないのだ。日が暮れ落ちて、我我は鬱陵島へ向つて進んでゐた。下の彈藥庫は負傷した戰友達で一杯だつた。戰友の靈を弔ひ、戰勝の假睡から覺めた翌二十八日、我我はまた手負の敵艦を袋攻にしたのだつたが、「敵艦降伏」の聲が全艦に響き渡つた時、俺達はまた何といふ素晴らしい光景を見たことだつたらう。あの傷ついた戰友、腕のない水兵、脚のない戰友達がどうして上つて來たのか、みんな甲板へ顏中を笑にして上つて來てゐたのだつた。そしてみんなで萬歳を唱へたのだ。その聲も、傷つかぬ前よりも、もつともつと大きかつた。（東京朝日新聞による）

皇國ノ興廢コノ一戰ニアリ、各員一層奮勵努力セヨ。（東郷平八郎）

いぎりすハ各人ソノ義務ヲ盡スコトヲ豫期ス。（ネルソン）

棚　圃

八　産土神と氏神

家が集まつて村をなし、鄕をなす。そこには、村社、鄕社がある。ちやうど一家の中に神棚があると同じである。その神社を中心として、家家の祖先が和樂し、團結したやうに、代代子孫が和樂團結して行く。或は小高い岡の上に、或はよく耕された田圃の間に、こんもりとした松杉などの木立に包まれたお宮がそれである。茂つた森の端に鳥居が見え、石燈籠の見える景色は、外國には決して見られない、我が國特殊の景色で、これが我が國特殊の歴史と國體とを語つてゐるものである。

かう。（かく）　護　相撲　娯樂

（飛田周山畫）　ほこら

かういふ神社が産土の社である。子が生まれてお宮參をするのは、この鄕土の一家に、新しい小國民が生まれたことを産土神にお知らせするのである。産土神は鄕土の守護神である。豐かな秋の實りの後では、この守護神の境内や、その附近に宮相撲の行はれることもあり、村芝居の催されることもあつて、娯樂の中心地ともなる。神代の昔、天の岩戸の前で、神神達が神樂を催されたやうに、

村人はここに集まつてお祭をするのである。大人も子供も一緒になつて樂しむのである。

都會の大きな神社の祭には、昔は大抵御輿を擔ぎ廻つたり、花山車を曳き出したりして、大層な賑ひであつたが、今は電線が縱横にかかつて居たり、電車が東西に走つたりするのも一つの原因で、さういふ事はやめになつたが、町内の家家に金屏風を立て廻して、昔の花山車の人形を飾り、軒毎に提灯をつるし、町内の子供が樽御輿を擔いで遊ぶなどいふことは、今の東京などにも遺つて居る。又神社の境内の神樂殿では里神樂を奏することも多い。この日、家家では赤飯を炊きなどして祝ふのである。

輿
山車
かかつて（かかりて）
樽御輿
擔いで（擔ぎて）
炊

産土神と氏神とは別である。氏神は同じ氏の人人の尊崇した神である。これは、家が段段大きくなつて、分家の分家、又その分家が出來るやうになつて、一族が多くなつて來たので、祖先を同じうする者が共同に祭つた神である。つまり家の中の神棚を、更に大きくしたやうなものである。一例をいへば、藤原氏の氏神は奈良の春日神社で、遠つ祖の天兒屋根命を祀つてあるのである。源氏の氏神は男山の八幡宮であるが、これは頼義、義家が尊崇し、義家は八幡宮の社前で元服をして八幡太郎義家と名のつた程であるから、源氏ではこれを代代氏神とすることとなつたのである。これ等はいふまでも無く、家を重んじ祖先を尊ぶ風から起つたものであ

同じうする（同じくする）
春日神社　奈良市春日町にあり。武甕槌、經津主及び天兒屋根命を主神とす。
八幡宮　京都府乙訓郡八幡町にあり。應神天皇を主神とす。
頼義　源氏。頼信の子。鎮守府將軍。（一七三四年）
義家　頼義の子。文武の名將。鎮守府將軍陸奥守。（一七〇一年―一七六八年）
重んず（重みす）

籍

緣故

なつかしい。

斥

る。しかし、今日では各市町村の住民は、本籍の人はもとより寄留民までも、その居住所の神社を產土神として尊崇し、さうしてその氏子となるので、產土神は氏神と同じやうになつた。

鄉土の神、氏の神、いづれも祖先に關係緣故があつて、子孫から見ればなつかしい親みがある。鄉土の人人はこれを中心として團結する。鄉土の平和をみだす者があり、氏の名を汚す者があれば、おのづからその鄉土から逐はれ、その氏から斥けられるのは、ちやうど一家から勘當されるのと同じであつた。

鄉土を離れて、遠方に出た者の、常に忘れることの出來な

ひとり山田を守つた

明治天皇御製

「子らは皆いくさの庭にいではてて翁やひとり山田もるらむ」。

あつぱれ（あはれ）

今上陛下

大正天皇。

芳賀矢一

福井縣の人。東京帝國大學名譽教授、國學院大學學長。文學博士。昭和二年二月歿す。（一八五七年—一九二八年）

いのは產土の社である。海外に出征した兵士の夢に入つたのも、なつかしい產土神の森であつたらう。ひとり山田を守つた父老たちも、日夕この產土神に祈つて、あつぱれ我が子も國家の爲に盡せと願つたのである。戰死者の爲に記念碑の建てられた場所も、產土神の境內が多い。戰役記念品の置かれたのもここである。明治天皇の御大患と聞いて、東京市民は二重橋の外にひれ伏して御快癒を祈念したが、地方の人人は皆產土神の境內に集まつて祈願した。今上陛下の御大禮を遙拜したのもここである。（芳賀矢一—國民道德教科書）

おのづから頭が下るなる神路山（一茶）

この松の實生えせし代や神の秋（芭蕉）

夕ばえの松（穴山勝堂筆）

雪舟　有名なる畫僧。名は等楊。備中赤濱の人。永正三年歿す。（一四八〇年―一五一六年）

淋漓

浄土宗　彌陀の他力の本願に救はれて浄土に往生することを目的する宗派。僧源空の創むるもの。

雄渾

九　故郷の松

私の少年の追憶は、弘浄寺の松の木で始まる。松は雪舟が墨色淋漓と描いた雄松のやうに、天へ昇らうとして地上との離別を惜しむ植物界の大蛇だ。

弘浄寺は、私の郷里にある浄土宗の寺である。委しくいふと、郷里の家の二階に大きな丸窓があつて、外を覗くと右手に見える寺である。然し私の追憶に問題となるのはこの寺の屋根でない、この寺の墓場の隅に小さく埋まつてゐる私の妹でない、この寺の奥にある稲荷の社でない、また庭の池へ水を飲みに出る狐でない。幾百年たつても雄渾の氣魄を

睥睨

瀟洒

怖

失はずに周圍を睥睨する松の木が、天氣の好い日には簾目綺麗に掃除された本堂前の廣場へ黑い影を投げるので、この寺が私の追憶の最初の頁を塞ぐのである。この寺が、寧ろこの大きな松の木が、少年時代に於ける私の遊び友達であつた。

私の少年時代の追憶には、梅樹が無い、櫻花がない、霧のやうに煙る晩春の柳が無い、又瀟洒な立姿の水仙が無い。私は少年の時、大地の生氣が一本の樹木と化したと思はれるこの松の木から、所謂男性美の影響を受けたことを喜ぶものである。私はこの弘淨寺の松の木を遊び友達としたといつたが、實際には私はその木を恐れたのである、一種の恐怖心

を以てその木に接したのである。松には雲雨を得て天に昇る大蛇のやうな龜裂の入つた甲羅の皮膚があり、觸れると手を刺す針のやうな松葉がある。松には人に婉麗の感をそそる何物もない。弘淨寺の松の木に關する私の追憶は、群青金泥の酒井抱一の松でなく、毅然として百難に堪へる雄姿が、紙上で風雨を呼ぶ雪舟、探幽の松である。私に語らねばならない追憶が多い。

煮え返るやうに熱い夏の日が續く。田地田畑に稻や麥が唇を潤し根を潤すに足る一滴の水もない。地面は破れ始め樹木は萎れかける。日中は蟬が雨か霰のやうに雨乞の歌を地上に降らす。夜分になると、家の前を雨乞の百姓が鐘や太

龜裂
婉麗
酒井抱一　江戸時代の畫僧。姫路の酒井侯の子、名は忠因。文政十一年十二月歿す。（一四二一年―一四八八年）
探幽　江戸時代の畫家。狩野家中興の祖。名は守信。延寶二年十月歿す。（一二六二年―一二三四年）

鼓を叩いて牛頭天王の御社へと急ぐ。物凄いほど眞暗な御社には、雨乞の百姓を迎へるため、提燈がともり篝火が焚いてある。御社の神主の家の座敷へ、昔から靈驗あらたかといはれてゐる探幽の瀑布の畫が出されてから、もう十日以上になる。沛然たる雨を呼ぶ筈の探幽の瀑布は魔力を失つたのであらうか。

十五日の滿願の朝早くから、無言の祈禱を歌つてゐる巨人があ

雨乞の圖

牛頭天王　印度の神。古が佛家、これを素盞嗚尊に附會して祀る。
篝
瀑
沛然
禱

豪　傲　鬚髯

強い風が吹きだす。否、それは雨を祈る松の木が吐きだす龍の唸り聲であらう。松の木の祈禱は答へられた。恐しく大粒の雨が落ち始め、半時間もたたない中に豪雨となつた。人間の歡喜以上に喜ぶのは弘淨寺の松の木である。誰か私の外に、篠突く雨を全身に浴びつつ傲然として立つ、この松の偉觀壯觀を見たものがあるであらうか。この松の木の態度は、百倍の勇氣を振ひ起して三軍を叱咤する猛將軍のそれであつた。

私は弘淨寺の松を單に樹木とは思へなかつた。面を拂ふ春風に乘つて、一つの白い蝶蝶がこの松にとまつた時、私はその溫顏に平和の微笑があることを知つた。私は鬚髯たる

帽—帽

野口米次郎　詩人。愛知縣の人。慶應義塾大學教授。慶應義塾出身。明治八年十二月生まる。

霞の春の日に、この松の木が奏でる午後の催眠歌を聞いた。そしてこの松が雪の朝にぼつてりと大きな綿帽子を被り、その綿帽子が太陽の光線を受けて金剛石のやうな光を放つた時の光景はどうだ。

私は朝念佛を聞いて起き、夜念佛を聞いて床に就いた。毎朝早く鐘の聲が弘淨寺から響いた時、私は私の尊敬するあの松の木の音であるやうに感ぜざるを得なかつた。夕景になつて木魚の音が聞えて來た時、私は私の畏敬するあの松の木の聲であるやうに感ぜざるを得なかつた。

（野口米次郎—松の木の日本）

無愛想

はづれ

一〇　遙かに私の村が

停車場を出て買物の包を小脇に、
無愛想無趣味な白茶けた道を、
汗になつて足速に、
とうとう向うの丘を登りきると、
ああ！
ゆるやかにうねる竝木路のはづれに、
高くさんさんと金綠の、
海角によせて碎ける海の浪のやうな、
ひとかたまりの森のあたま。

鷺

印璽

あれが私の住む村だ。
なんといふ美しい村だらう。
なんといふ木立に惠まれた村だらう！
七月の夕暮の空は、
薄紫の晶玉の清らかさをして、
朱鷺の拔け毛のやうにほそい雲が、
すらすらと輕い模樣をゑがいてゐる。
私がそこの我が家へ著く頃には、
水の垂れさうなあの天へ、
宵の明星がたつた一つぴかりと、
金の印璽を捺すのだ。

待宵草

普通には月見草と呼べり。

尾崎喜八
詩人。東京市の人。明治二十五年一月生まる。

さうすると村ぢゆうが、
やはらかい、ふかぶかとした蔭に充たされ、
待宵草と小川とだけが闇に浮き、
私の家や庭などは咲き亂れた星の花の下で、
ただ地上の小さなともし火の、
光ばかりになつてしまふだらう。
そこへ歸つて水を汲み上げ、
汗をさばさば拭き取つてから、
この包をひろげるたのしさ。
ああその我が村我が家が向うに見える。

（尾崎喜八―日本詩集）

群

松阪
今の三重縣松阪市。

老舗

本居舜庵
國學者。舜庵はその號。伊勢松阪の人。（一三三九〇年―一四六一年）

花客

拍つて
（拍ちて）

一一　眞淵と宣長

賀茂眞淵

時は夏の半ば、「いやとこせ」と、のどやかに唄ひ連れゆくお伊勢參の群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松阪なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に、「御免」といつて腰を懸けたのは本居舜庵といふ、魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の常花客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、「ああ、

岡部先生　賀茂眞淵のこと。通稱は衞士。縣居と號す。（一三五七年―一二四二九年）

田安様　田安宗武。德川吉宗の子。（一七五年―一二四四二年）

浮腫

逗留

無いか（無きか）

殘念なことをなされた。あなたが、よく名前をいつてお出でになる江戸の岡部先生が、今の先若いお弟子と供を連れてお立寄になつたに」といふ。舜庵は「先生がどうして此處へ」と、いつものゆつくりした調子とは違つて、あわただしく問ふ。

主人は「何でも田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸に參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお著きになつた所、すこしお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいとのことで御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお休になつて、參宮にお出かけに

本居宣長

追うた（追ひたり）

二見が浦　三重縣度會郡。

鳥羽　三重縣志摩郡。日和見山は鳥羽灣を下瞰す。

なりました」。舜庵「それは殘念なことである。どうかしてお目にかかりたいが」。「あとを追うてお出でなされませ。追ひ付けませう」と主人がいふので、舜庵は、一行の様子を大いそぎで聽き取つて、あとを追うた。

あとを追うて松阪の町を離れて、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごすごと我が家に戻つて來た。

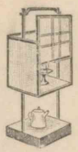
數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から、鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松阪なる新上屋に宿つた。「若し歸にまた泊られることがあつたならば、どうか知らせて貰ひたい」と賴んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋

訪うた（訪ひたり）

村田春郷　歌人。江戸の人。（一三九九年—一四二八年）

春海　歌人。織錦齋、又琴後翁と號す。（一四〇六年—一四七一年）

行燈



有德公　八代將軍德川吉宗。（一三二四年—一四一一年）

迸つて（迸りて）

からの使を得たので、取るものも取り敢へず旅宿を訪うた。衞士が同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名嘖嘖たる一世の老大家である。年老いたれど頗豐かな、この老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を、溫和なる性格に包んでゐる三十四歳の壯年、しかも、彼は二十三歳にして京都に遊學して醫術を學び、二十八歳にして松阪に歸り

契沖　國學者。大阪の圓珠庵の僧。（一三〇〇年—一三六一年）

喜んで（喜びて）

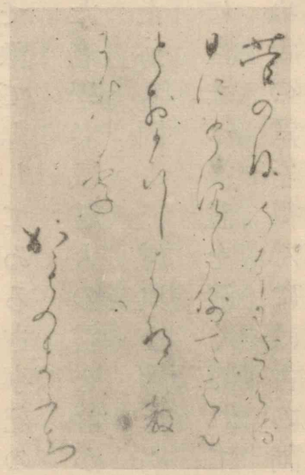
醫を業としてゐたが、京都で學んだのは只醫術のみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。「我も固より神典を解き明らめんとの志であつたが、それにはまづ漢意（からごころ）を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を明らめ得た上でなければならぬ。古の詞を明らめ得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故、自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、すでにかく年老いて、殘の齡いくばくも無く、神典を說くまでに至るこ

とを得ない。御身は年も若く、行先が長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。しかし、世の學に志す者は、とかく低い處を經ないで、すぐ高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬものである。この旨を忘れず心にしめて、まづ低い處をよく固めておいて、さて高い處に登るがよい」と諭した。

登らう。（登らん）

菅のねのながきはる日にそでたれて見んとおもひしはなゝ散にけりかものまぶち



賀茂眞淵筆

夏の夜は早くも更けて、家家の門の皆閉され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家の潛戸を入つた。鄰家なる桶利の主人は律儀者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとんとんと桶の箍（たが）を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵はその後江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中にはひつて名簿（みやうぶ）を捧げ、うけひごとを記して、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來、松阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、これは答へた。門人とはいへ、その相會うたことは僅かに一度、ただ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

箍

村田傳藏　眞淵の門人。阪大學の通稱。

はひつて（はひりて）（はひいりて）

相會うた（相會ひたる）

今を距る百六十餘年の前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松阪日野町なる新上屋の行燈の光は、その下に語つた老學者と若人とを照らした。しかもそのほのぐらい行燈は、わが國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。（佐佐木信綱―賀茂眞淵と本居宣長）

人の學を講じ業を勤むるは、皆時日の力を以てす。故に志士は日の短きを惜しむ。嗚呼この日再び會ひがたく、今年重ねて來らず、これを以て、學者最も時日を惜しまんことを要す。豈時を廢し、日を曠しくすべけんや。（貝原篤信）

飯高郡　當時の稱呼。

放つて（放ちて）

佐佐木信綱　歌學者。文學博士。帝國學士院會員。伊勢の人。竹柏園と號す。明治五年生まる。

一二　友情

人と人とが出合ふと、二人は間もなくそれぞれの位置を取るものです。それが交互に讓り合つて、二つの性格は、一定の形を取つて組合せとなり、そこに彼等の世界が出來るのです。

私は小野君よりは年長でした。そこで世間的なことには彼に勝つた處を見せました。小野君は思想的な問題に於いて私に勝れた位置を取りました。二人は互に他の長所を許して、自分の長所に誇をもち、そして交り續けました。

友人の少い二人にとつては、互にまづ一番親しいといふ

讓

誇

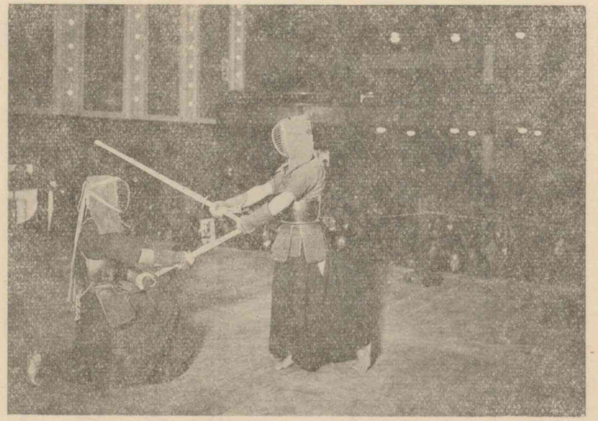
笑うて　擇　弛

間柄でした。それなのに何故でせう、別れてゐると會ひたかつたり、話したかつたりする小野君が、向ひ合つて見ると不思議に話がなくなるのです。彼が笑うても私は笑へなくなる。彼は自由に話してゐるのに、私の心は固くなるばかりです。頭も顏も胸も石のやうに重く固くなつて來るのです。

私は彼との交を大切にしたい心で一杯でした。私には、小野君がかういへば笑ひ、かういへば怒るといふことがよく解つて居りました。だから彼に向つては、彼の笑ひ怒りに當てはめて私の言葉を擇び、また行爲を自制したのです。もし私がそれを誤つたなら、その程度に隨つて二人の交の組合せは弛み解けるでせう。で私は一層デリケートにその組合

導

せを守るために、言葉や振舞に氣を付けましたが、かかる友情が却つて憂鬱な重荷と變り始めたのです。



撃　劍

處がここにいい事が起りました。それは撃劍です。ある日二人は知人を訪ねて、ある寄宿舍に行きました。その時知人が撃劍をやつてゐる場所に我我を導いたのです。そしてふとした話具合から、私は小野君と一仕合して見ることになりました。

二人は道具をつけ、竹刀を執つて立ち上り、互に一禮しました。そこまでは只の二人の間でした。處が互に中段に竹刀をつけて、互の眼を見交はして見ました時、そこに常常と異なつた二人の眼を見出だしたのです。鐵の格子の中から光る彼の目は、特に鋭く私の眼を射ました。明かにそれは私に敵對してゐます。

「やあ」、彼のこの聲を聞くと共に、私は全身に走る神經を感じました。

「やあ」、私も叫び返しました。

彼は身體をじりじりと持ち上げ、またじりじりと下げて、次第に私に迫つて來ました。この時私は一時に「やああ」と叫

喚勃鬱

激

喚を上げたいやうな心持が鬱勃として起つて來るのを感じました。それがぐつと私の腕に力を籠めさせたのです。私はぢつとしては居られませんでした。

「やつ」、私は無暗に竹刀を突き出しました。それを横に拂ふと共に、彼もまた突いて來ました。私はそれを拂ひもしないで、直ちに彼の面に打ち下しました。ぽーんと手應へがありました。それが私の腕に快感を與へました。

私達は大分久しく鬪ひました。私は胴を打たれ、面を打たれ、また小手などは散散に打ち叩かれたのでした。然しまた私も小野君をかなり激しく打ち叩きました。二人は面の鐵格子から息をふうふうと吹くまで疲れてゐました。

「よしませう」。

漸く柔らいだ小野君の眼がかういひました。二人は禮をして左右に別れました。

私はこの擊劍に不思議な滿足を覺えました。道具を取つて向ひ合つた時、私は小野君の手を握つて笑ひ懸けたいばかりの氣持になつてゐたのです。それは嬉しさと感謝の交つた心持です。端的に眞情を打ち撒けたやうに思へたからです。小野君も何故か滿足を感じてゐるやうでした。

二人の友情はこの後一層の生氣と親しさとを加へました。（坪田讓治）

握つて（握りて）
感謝
撒
坪田讓治　文學者、岡山縣の人。早稻田大學英文科出身。明治二十三年生まる。

一三　野口英世

磐梯の山紫に秀麗の姿を横たへ、猪苗代の湖白く的皪たる鏡を展ぶる處、一小驛ありて翁島と呼ぶ。この一寒村こそ尊き科學の殉敎者にして、日本が世界に誇り得る偉大なる學者、野口英世を生みたる名譽の鄕土なれ。

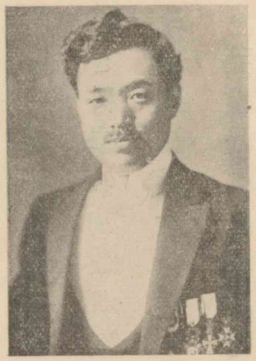
英世幼名は清作。その家極めて貧しかりき。三歳の春、過つて爐中に落ち、火傷のため左手の指は皆癒著して、思はざる不具となれり。長じて小學校に入るや、動もすれば群童にその不具を嘲笑せらるるを慨し、自ら努めて運命を開拓し、彼等に一矢を酬いんと志しぬ。夜、書を讀まんとするに燈火な

磐梯山　福島縣耶麻郡にあり。
猪苗代湖　磐梯山の南麓にあり。耶麻、安積、北會津の三郡に跨る。
過つて（過ちて）
嘲

辛うじて（辛くして）

渡邊ドクトル　名は鼎。現に若松市に住む。

ければ、或は小學校の小使部屋に往き、或は爐中の榾火の光を便り、或は鄰家なる旅籠屋の手傳をなしつつ、風呂焚く火もて讀書せしことも一再ならず。又早朝に附近の小川や湖水等にて捕れる泥鰌、小魚の類を鬻ぎて家計を助け、辛うじて筆墨をも購ひ得たりき。



野口英世

その後諸家の好意によりて若松なる渡邊ドクトルの手術を受け、癒著せる英世の五指は箇箇に分離せられ、ほぼ常態に復るを得たり。深くも醫術の恩惠に浴せし彼は、自らも亦醫家となりて濟生救民に力を致すべく決心し、遂に渡邊氏に請うてその書生となれり。時に年十八。

邊陬

抱いて（抱きて）

血脇守之助　東京齒科醫學專門學校長。

新なる學問の天地に身を置きてより、英世の精進は更に加はりぬ。まづ英佛獨の語學を修めしが、辭書を用ゐるに、斷じて一語を再び引かじとの誓を立てぬ。されば、僅かに一年にして醫學の原書を讀解し、漸次その飜譯をさへ試みるに至り、殊に獨逸語は學ぶこと三箇月にして、「我既に獨逸語を卒業せり」と壯語するの域に達せりといふ。されど、鬱勃たる意氣、いかでかこの邊陬に晏如たり得ん。業成らずんば死すとも還らじの決心を抱いて鄕關を辭し、東京に移住したり。刻苦の效は空しからねども、學資の窮乏は如何ともし難く、嘗て一面識ありし血脇守之助氏を訪ひ、人力車夫となりて勉學せんと相談せり。血脇氏は當時未だ志を得ざりしが、苦

獲

フレキスナー　アメリカの醫學者。ロックフェラー醫學研究所所長。（西暦一八六三年―）

任俠

境の中に自ら薄給を割きて、骨肉も啻ならざる援助と激勵とを與へたり。英世はその恩に感じ、心服して弟子の禮を執り、一層の努力を惜しまざりしかば、翌年終にわづか二十二の青年にして醫師の免狀を獲たりき。

天才の芽はかくて徐徐に伸び來れり。雄心落落たる英世の夢は、嘗て傳染病研究所在勤中に相識りし米國の大醫フレキスナー教授の許に飛べり。しかも渡航資金なきを奈何せん。これを憐みしはまた血脇氏なりき。英世の光輝ある成功史の一部には、實に血脇氏の明察と任俠とを特筆せざるべからざるなり。

明治三十三年十二月、英世は多年の宿望を達して、その夢

縷

碾轉

驀進

渉獵

寐にも忘れ得ざりし米大陸の土を踏めり。然るにその唯一の憑みとしたるフレキスナー教授はペンシルバニヤ大學に轉任早早の事とて、快く彼を迎へたれども、未だ異邦人をその助手として任用する自由を有せざりしかば、英世は一縷の望を失ひ、暫く茫然自失せざるを得ざりき。されど、砥石の上に碾轉せらるるは珠玉が當然經過すべき道程ならずやと、英世は翻然として悟り、捨身の苦行に驀進せり。彼はペンシルバニヤ大學の圖書館に籠ること五十餘日、英獨佛の文獻を渉獵して一心不亂に、睡を催せばそのまま机に凭りて眠り、水と麵麭とを以て纔かに飢渴を凌ぎつつ、遂に大判全紙二百五十頁の蛇毒研究に關する一卷を完成し、これを

教授に示せり。教授も深く英世の非凡なる精力と熱意とに動かされ、遂に箇人としてその助手に用ゐるに決せり。「死中に活を求む」とは、誠に英世が執りし手段の謂なりけり。

研鑽

かくて辛くも飢を免れ得たる英世は、薄給窮乏の裏に、鋭意專念研鑽に沒頭せり。而して渡米後未だ期年ならざる翌年の秋、全米萬有科學會に於いて、フ教授等に推されて蛇毒研究の講演を試み、矮小白面の異邦の一書生は、忽ち米國學界の權威等の中に、

嶄然

嶄然として頭角を見はし來れり。

爾來三年の英世が刻苦は、次次に前人未知の學說となりて學界に貢獻し、カーネギー學院よりは屢〻奬學金を受け、ペンシルバニヤ大學は彼を擧げて病理學上席助手に任じ、次いで歐洲留學を命ぜり。英世の欣快思ふべし。しかも彼は「今は歐洲には永く滯在する要なし」と自信の一言を吐き、各國留學生が殺到し、嘗ては自らも憧憬の的とせし獨逸を避けて、閑靜なる丁抹を選び、その首都なる國立血淸研究所に入りて研究を重ね、此處にても淹留一年の間に、價値ある三篇の著作を完成せり。歸途、英獨佛諸國を視察し、千九百四年秋歸米せしが、折から紐育にロックフェラー研究所新設せられ、フ教授はその所長となれり。英世も恩師に從つて研究所最高幹部の列に加はり、細菌部長の重任を擔ふに至りしのみならず、この間、故國には未だ嘗て類例無き大部の論文を提出して、文部省より醫學博士及び理學博士の學位を授け

その首都
コペンハーゲン

エクワドル　南米北西部の共和國。

猖獗

アクラ　黄金海岸に在る都市。

られ、又帝國學士院會員に敕選せられぬ。

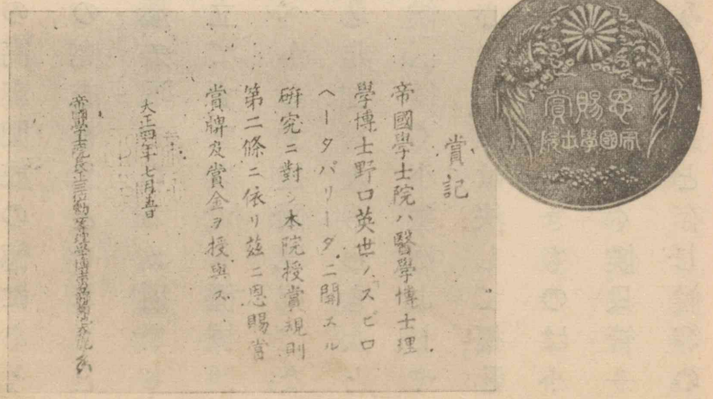
英世の業績中殊に貴重なるは、古來明かならざりし黄熱病の病原體發見とその療法確立とにして、こは實に萬古不朽の偉勲といふべく、これに依りて救はれたる南米エクワドル國は、英世の功に酬ゆるに名譽陸軍大佐の待遇を以てし、記念塔を建てて永くその功を勒し、又首府の一角には野口町の名をさへ附せり。然るに西アフリカ沿岸にては尚この病猖獗を極めたるを以て、英世は自らこれを解決せんと欲し、昭和二年十一月、單身西アフリカなるアクラの地に航し、殆ど寢食を忘れてその研究に努力せしが、遂に恐るべきこの病に感染し、偉業半ばにして、翌年五月二十一日再び起

殉教者

たずなりぬ。嗚呼科學の殉教者、人道の戰士は、此の如くにして、惜しみてもなほ餘ある五十三年の生涯を棄てたるなり。

邊陬の農家に生まれたる一貧兒英世が、遂に一世の碩學として世界の大舞臺に立ち、人類の幸福に幾多の寄與をなしつつ莊嚴なる死を遂げ、その死は殆ど世界のあらゆる國語もて痛惜せられしは誠に偉なりといふべし。しかも

帝國學士院賞記と賞牌



英世に於いて更に偉とする所は、その高潔圓成の德にあり。彼が學術の研鑽と同時に深く人格の完成を念とせしことは、恩師血脇氏等に送りし書信中に屢〻看取せらるる所なり。いはく「人間は技倆のみにては世に立てず。立ちても機械同様なり。是非とも相應の德行なかるべからず、技倆は第二なることを始めて感じ候。爾來小生は是非とも人らしき人となりたしとのみ思ひ、修養致し居り候」。いはく「小生はよしやこれ以上如何なる逆境に陷るとも、心の平和は決して擾亂せらるることなし。勉め得る限は勉めて、達し難きものは小生の力以外と存じ、失望することは必ずこれなく候。只管一瞬間を油斷なく誠實にやることのみが祕訣と存じ候」等の

擾亂

只管

字句にて、その面目のほぼ想像せらるるのみならず、血脇氏の恩を銘記すること最も深く、十五年間に長文の書を寄すること實に二百餘通に達せりといふ一事を以て見ても、その性格の敦厚なりしことを知るべし。

英世また天性至孝。「小生の過去に於いて、最も懸念と奮起との種は母上なりき。又將來に於ける小生の光明と勇氣との源も一に母上の愛にこれあり候。今回も一度歸朝したけれど、旅程甚だ遠く、目下の境遇これを許さず候。然し數年内にはどうか都合して歸省致すべく候」と。これ實に大正四年帝國學士院賞受領當時、血脇氏に致しし書簡の一節なるが、その後三箇月を出でざるに、親友より送られたる慈母の寫

眞の老衰せる面影に、そぞろ思慕の念已むこと能はず、急遽旅裝を整へて歸國せり。別後十六年にして母子再び相會ひし翁島驛頭の劇的光景は、眞に幾百の群衆の暗涙を誘ふものなりき。

嗚呼英世の業績は此の如き崇高の人格を背景として愈〻光輝を發するが如き感あり。否、此の如き人格ありて、始めて仁術の眞精神を發揮せる偉業は成りしなるべし。殊に諸人好意の諫止を斥け、萬里絶海の蠻地に航し、烈しき瘴癘と戰ひてこれを征服せんとせし努力の如きに至りては、豈ただ名と利とをのみ趁ふに忙しき尋常人のかけても企て及ぶ所ならんや。

瘴癘

一四　比叡の鳥

寢床を出て、齒磨楊枝を使ひながら、湖水の見える部屋に往つて見た。朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりやや高く、やや低く、無數の杉の梢が、鋒のやうに突つ立つてゐる。左手には北谷の向うに當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背に竝べて湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れて居る。非常に靜

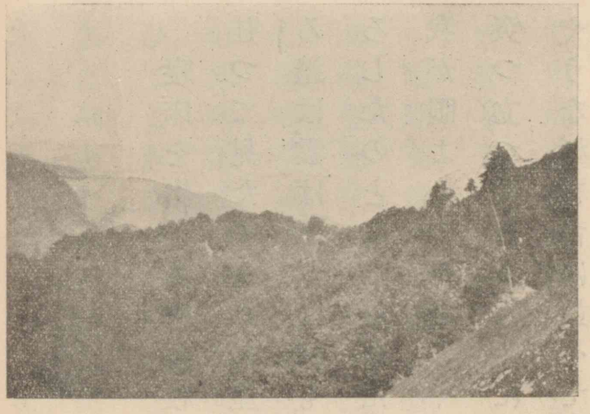
湖水　琵琶湖を指す。

突つ立つて（突き立ちて）

囀つて（囀りて）

かだ。自分の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。

ただこの天地をわが物顔に啼き囀つてゐるのは小鳥だ。



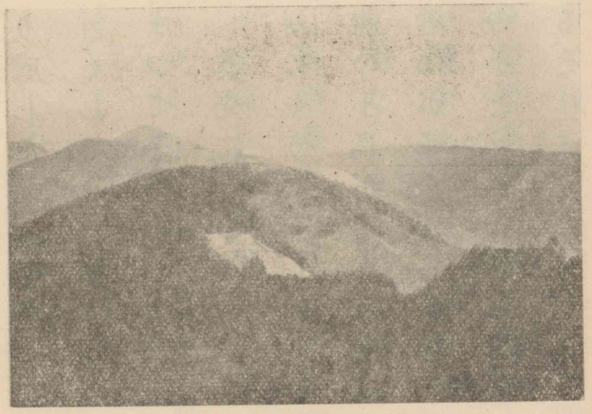
比叡山頂

何といふ可愛い聲であらう。名のわからぬのが殘念だ。そこの杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。また遙か向うの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。また、その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然その

優しい。（優しき）

錯綜

面白い。（面白し）



上の眺望

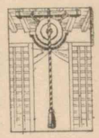
間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、また凛凛しい所があつて、その音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名のわからぬのが、殘念だ。それも一羽ではない、三羽四羽と聞くうちに、だんだん殖えてくる。前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は横絲のやうに、互に錯綜してよく調和を保つところが面白い。

突然、けんけんと、けたたましい音が谷を横ぎる。此方の谷

にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやや急調だ。多分山鳥ででもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、ただ一聲にひき裂いたかと疑はれる。暫くしてその聲は、谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、そのあとは元のとほり靜かになる。

裂いた。（裂きたる）
浸みこんで（浸みこみて）
絣
織つて（織りて）

眞先にその靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれた絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、又縱絲を織つて前の小鳥が啼く。又横絲を織つて次の小鳥が啼く。絣が啼く、縱絲が啼く、横絲が啼く。この美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ち設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけて呟くのかとも疑はれる、他の鳥の聲聲が、皆高調で晴れ晴れとした中に、ひとり、低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう」といひ、他の者は「山鳩だらう」といつた。


鰐口

啄木鳥

漂うて（漂ひて）
薄らいで（薄らぎて）

高濱虛子
俳人。愛媛縣松山の人。名は清。明治七年二月生まる。帝國藝術院會員。

琵琶湖の上には、まだ漠漠とした白雲が漂うてゐる。杉の梢を流れる霞は少しづつ薄らいで來て、だんだんと谷が深く見えてくる。（高濱虛子―新寫生文）

夏草に油蟬なく山路かな
日燒せし旅の戻りの京の宿
仰向いて光りただよふ螢見る（高濱虛子）

眠つて（眠りて）
見よう（見ん）
驚いて（驚きて）

一五　兒獅子

或日兒獅子が母獅子の眠つて居る間に、森の中で獨遊び戯れてゐた。種種變つたものが氣を引くので、兒獅子は一寸周邊（あたり）を探檢して見ようといふ心になり、自分の住家の外の世界はどのやうなものかを見極めようとした。やがて兒獅子は遠くにさまよつて歸路を見失ひ、何時の間にか迷兒になつてしまつた。

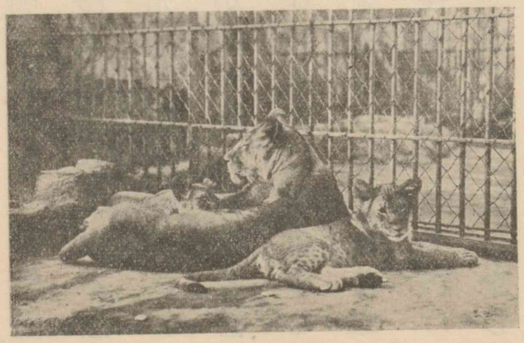
兒獅子は驚いて、氣も狂はしく八方に走り廻り、悲鳴を揚げて母を呼んだが、母の答は無かつた。疲れ果ててせんすべもなくなつた時に、ちやうどこの頃兒を失つた親羊がこれ

愛撫
送つて（送りて）

に出遇つた。羊はあはれな啼聲を聞き附けて、兒獅子の近くに來て、優しく色色と世話してくれた上、遂にその兒獅子を我が養子として引き取つた。

羊はこの迷兒を能く愛撫して育てたが、その内にそれが親羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味惡く見えるやうになつて來た。その眼の底には、羊の合點のゆかぬ不思議な光を見ることも度度であつた。

當座の内は、養母と養子と共に幸福な月日を送つて居たが、或日向うの山の彼方に、空を壓し



親兒の獅子

て、大きな一頭の獅子が雄姿を現した。獅子はふさふさとした鬣を振つて、木魂となつて谿谷に鳴り響くやうな吼聲を發した。母羊は恐れ戰いて、立ちすくんだ。しかし、この不思議な音響が兒獅子の耳に達した時に、兒獅子は魔に打たれたやうに、これまで嘗て覺えない感じがして、全身が活き活きと跳り上るやうな氣がした。その獅子の吼聲は兒獅子の心の底の琴線に觸れて、或新しい威力を感じさせたのである。さうして新しい不思議な自覺が發生したのである。

兒獅子はその獅子の吼聲に應じて吼え返した。さうして一旦勃然として起つて來た新しい力は抑へ難くて、遂にその情深き母羊を名殘惜しげに見やりながら驀地（まつしぐら）に向うの

鬣
魔
新しい。（新しき）
驀地

山の獅子の方へ飛び去つた。

迷兒の獅子は自己を發見したのである。この時まで迷兒の獅子は、母羊の傍に遊び狂つて居た小羊達が爲し得ない事が出來るとか、普通の羊に比して格別勝れた力を持つて居るとかいふやうなことは、夢にも想像しなかつたのである。まして山中の百獸を慴服せしめるやうな威力が、おのれにあらうなどとは想像もしなかつた。彼の考は只單純な羊の考で、犬が見えたらば逃げ、狼の哮えるのを聞いては戰慄するものとしか思つてゐなかつた。然るに、今はこれ等の犬や狼が、おのれの姿を見て直ちに逃げ隱れるに至つたのを知つて、却つてみづから驚いてゐるのであつた。

慴服
戰慄
思つて（思ひて）

因循
教唆
豹

兒獅子もみづから我は羊なりと思つて居た時には、羊の如く臆病で因循であつた。隨つて羊だけの力と勇氣しか持たず、到底獅子の力を出し得なかつたのである。たとへ他から教唆するものがあつても、「なかなか獅子の力など出せるものか。僕は普通の羊である。普通の羊と異なるところは無い。他の羊の爲し得ぬものは、僕にも到底出來ぬのだ」といふに止まつた。然るに、獅子といふ自覺が出來た今日、この兒獅子はここに心機一轉して、威風四鄰を壓するが如き勇猛の動物となり、遂に山中に於いても、豹と虎との外には競爭するものもない森の大王となつたのである。自覺は確かに彼の力を二倍にし三倍にし、或は幾層倍にしたか分らない。こ

咆哮
跋渉
マーデン　アメリカの哲學者、著述家。
上谷續　兵庫縣の人。明治六年生まる。日本船主協會理事。

の力は彼が獅子の咆哮を聞く前の瞬間までは、到底認められなかつたのである。

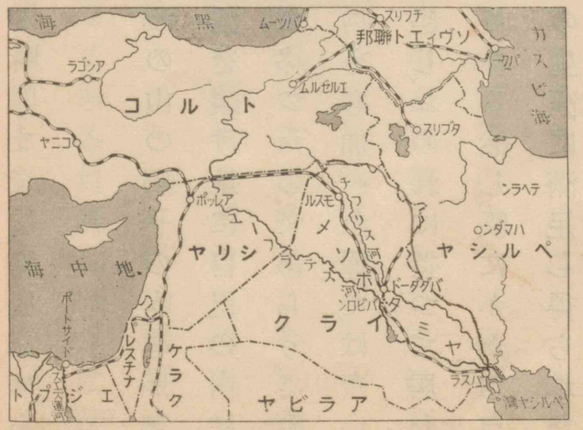
兒獅子は自覺を喚び起した。向うの山の獅子の咆哮が無かつたなら、兒獅子は永久羊の生涯を續け、遂に自己の内に潛在する獅子の本性を悟らずして終つたのであらう。されば、獅子の咆哮は彼の力に一物をも加へた譯ではない。單に内にあつたその偉力を喚び起し、おのれに持つて居たその勇猛心を喚び醒ましたのみである。然し、既にかかる自覺が出來た後は、兒獅子は最早羊の生涯に滿足し得られなかつた。山野は實に彼の意のままに跋渉するところとなつた。（マーデン―如何にして希望を達す可きか―上谷續譯に據る）

バグダード メソポタミヤ地方、イラク王國の首府。往時世界に於ける回教の中心地、又その教主の帝都として繁榮せし處。

蜿蜒

一六　バグダード旅行記

バグダードを飾るものは、何といつてもチグリス河である。一年中八箇月位は焦熱地獄で、人間の住むべくも見えない都に、昔からあらゆる人種が、榮枯盛衰の歷史を遺してゐるのが不思議な位であるが、これは一に、蜿蜒（エンエン）一九四〇粁の大河の水から人類の文化が涌き出したからである。古はチグ

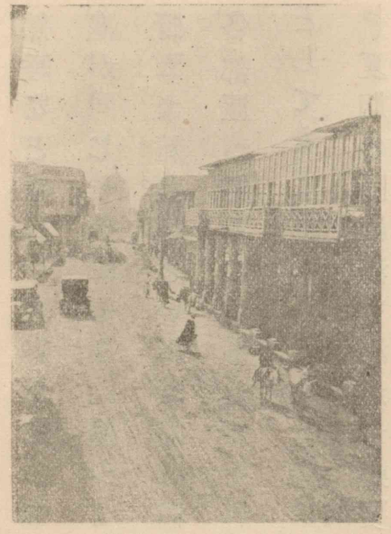


灌漑

索然

沙漠

リス河とユーフラテス河との間の地域には、幾筋もの運河があつて、灌漑に資してゐたが、第十二世紀から第十四世紀にかけての蒙古人侵入のとき、悉く破壞し去られた爲、今は索然（サクゼン）たる沙漠で、滿目荒涼何の趣（おもむき）もない。ただ處處にその迹（あと）とも覺しき凸凹が殘つてゐるのみである。



バグダードの市街

バグダードの暑さは、三月に始まつて十月まで續く。眞夏には、住民いづれも河邊に露臺を出して、蒼空（ソウクウ）の星を仰ぎな

がら寢るのである。私のバグダード再遊はイランに著任の翌翌年六月の眞夏で、ホテルの張出しにしつらへたベッドの上に蚊張を釣つて眠つたが、馴れぬ星の光に眼が冴えて、熟睡などは思ひも寄らなかつた。ちやうど五十脚ほどの寢臺が、同じやうにそこに連つてゐたので、圖らずも、河ぞひの野天で雜魚寢といふ珍しい體驗をした。明け方空が白む頃、各、部屋へ歸るのであるが、それでも九十度位の溫度で、むつとしてまどろまれさうもなかつた。

湯槽

夏期の間は湯を沸かす必要がない。水が悉く空氣に熱せられて、百度位の熱さになつてゐる。風呂に這入るときには、湯を立てろと命ずると、水を湯槽に漲らして、その中に氷を入れて、適當に冷してくれる。これがホテルに於ける豪奢な入浴である。私もこれを二度ばかり試みた。湯を沸かすのでなくて、水を冷ますのに時間が掛るのだ。

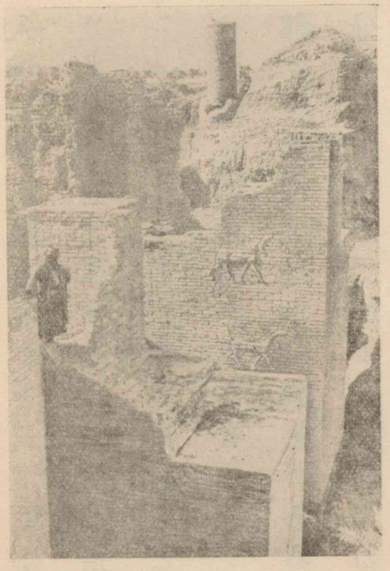
ササン王朝　西暦二二四年より六五一年の間にペルシヤを統治した王朝。

バグダードの東南約百粁ほどの處まで、チグリス河に沿うて灰色の荒野を下ると、ペルシヤ帝國ササン王朝時代の都クテスィフォンの遺蹟がある。廣大莊嚴な古代建築の三分の一ほどが頽れずに殘つてゐる。

バグダードの南西百五十粁ばかり、ユーフラテス河の右岸に臨んで、バビロニヤの中心である古代の大都バビロンの遺蹟がある。バベルの塔もこの附近にあつたといはれ、今から三十年前までは、その塔の殘礎と傳へられたものが殘

基壇

つてゐた。今見えるものは、大きな所謂ジッグラートの迹で、その基壇だけである。バビロンの遺蹟のうちでは、近代の發掘にかかる獅子だけが深い印象を與へる。狼に似た野犬が泥土に委した宮殿の廢址を、物に憑かれたやうに驅け廻つてゐるのが、萬物を滅ぼす「時」のあらびを象徴するかとばかりに物凄かつた。ユーフラテスの河邊に近く、ネブカドネザール帝の二重宮殿や、その様様の廟社が少しづつ姿を現してゐる。この附近には、椰



バビロンの遺址

アレクサンドル大王　マケドニヤ王。四方に遠征し、ギリシヤ、シリヤ、ペルシヤ、埃及、印度を征服し、バビロンにて病歿す。（西暦前三五五年―前三二三年）

鋪道

橄欖

子と棗の木立とが寂しく點綴して、古の豪華を物語る由もないアレクサンドル大帝時代のギリシヤ劇場の迹と稱へられるものが、その東に發掘された。側壁は悉く燒煉瓦で出來てゐる。このあたりの鋪道なども、おぼろげに古バビロンの壯麗を偲ばせるだけである。

チグリス、ユーフラテスの二大河は南に流るること七八百粁にして、合流してシャット・エル・アラブとなる。これが兎角昔からペルシヤ、アラビヤ間の係爭問題を惹き起す種となつてゐる。このあたりは何處までも涯無き椰子林で、象でも遊んでゐさうに思はれる。又處處に橄欖や桑や柘榴の樹がペルシヤの南部と同じく繁茂してゐる。

イラク王國の主要産物には、石油の外に乾棗（ハシナツメ）がある。九月から十一月頃まで、漂泊のアラビヤ人が、チグリス河の島島からやつて來て、この邊にキャムプを張り、男が果物を摘み取り、女がこれを籠や箱に入れる。生憎我が國などでは餘り需要のないものであるから、日本のアラビヤ通商が片貿易になるのである。その外に、多少の羊毛、棉花、米麥等を産するが、我が國でも尚ここから輸入し得るものについて、十分研究する必要があると思ふ。

チグリス河邊に滯在二日、明日はいよいよ未明に飛行機上の客となるので、空から瞰るアラビヤの風物をいろいろ想像しながら、早めに床に就いた。（笠間杲雄―沙漠の國）

瞰

笠間杲雄　法學博士。特命全權公使。石川縣の人。東京帝國大學法科政治科出身。明治十八年五月生まる。

菩提樹

アルプス　中西歐と南歐との大障壁をなす、歐洲第一の高山。

一七　菩提樹の花蔭から

御はがき有り難う。

はるばる海を渡つて、今このアルプスの中腹なる町まで來ました。

今日は丁度土曜日で暇を得たから手紙を上げます。

君の御活動は雜誌や新聞で時時知つて、非常に心悅ばしく思つてゐました。それにつけても、今井君はどうしてゐますか。

今私のゐる所は伊太利境の町で、パリの大學の夏休を、この地の大學での夏期講演を聽きに來てゐます。日本

人は天にも地にも僕一人です。

七月から十月まで四箇月ここにゐて、十一月初旬にはパリへ歸ります。

講義はやうやう面白くなりましたが、中には隨分、もつと旨い事がいへるものをと思はせるものも少くありません。それが爲には自惚だか自信だかも與へられます。只いろいろな問題で考へさせられる事が多く、それに月日の經つのが何より早く、それのみが心がかりのやうに思ひます。

涼しい大氣の中を、燕が群をなして町の上を飛んでゐます。アルパイン連嶺が雪を頂いて、いつも美しく輝いてゐます。

オランジュ

吉江喬松
佛文學者。文學博士。長野縣の人。早稻田大學教授兼文學部長。明治十三年九月生まる。

菩提樹の花が咲き匂ひ、オランジュが林の中に香りを立て、夕方イルゼの川の岸の丘の上をあるいてゐると、山の中腹の草場の中から、鈴を鳴らして、羊の群が牧犬に守られながら降りて來ます。

伊太利へは國境を越えて四五時間で行かれます。が伊太利行は來年の夏まで延ばすつもりです。

僕は幸に健康でゐます。

時時御便りを下さい。別に繪葉書を一枚さし上げませう。（吉江喬松）

椰子の實

生ひや茂れる

一八　椰子の實

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。
ふるさとの岸を離れて、
なれはそも浪にいく月。
もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる。

椰子林

日にか歸らん

島崎藤村　文學者。名は春樹。長野縣木曾の人。明治五年二月生まる。明治學院出身。初め詩作に名ありしが、後小說に轉ぜり。

われもまた渚を枕、
ひとり身の浮寢の旅ぞ。
實をとりて胸にあつれば、
あらたなり流離の憂。
海の日の沈むを見れば、
たぎり落つ異鄕の涙。
思ひやる八重の潮路、
いづれの日にか國に歸らん。

（島崎藤村―藤村詩集）

極樂　佛教にて西方十萬億土にありといふ淨土。

蔽うて（蔽ひて）

一九　犍陀多

或日の事でございます。お釋迦様は、極樂の蓮池の縁を一人でぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。

池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蕋からは、何ともいへない好い匂が絶間なくあたりへ溢れて居りました。極樂は丁度朝でございました。やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄に當つてをります

覗

蠢いて（蠢きて）

まをし（申）（まうし）

から、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

芥川龍之介

すると、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に止まりました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火を附けたり、いろいろ惡事を働いた大泥坊でございますが、それでも、たつた一つ善い行をした事がございますと申しますのは、ある時、この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路端を這つ

て行くのが見えました。犍陀多は早速足を擧げて踏み殺さうと致しましたが、「いやいや、これも小さいながら命のあるものに違ない。その命を無闇に取るといふことは、いくらなんでも可哀さうだ」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出來るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲を懸けてをりました。

むくい。（報）

翡翠

た。お釋迦様はその絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、はるか下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上つてゐる物があると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといつたらございません。その上、あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つてゐて、たまに聞えるものといつては、ただ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。これは、ここへ墮ち

まつくら
まくら（眞暗）

溜息

て來るほどの人間は、もう樣樣な地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへもなくなつてゐるのでございました。ですから、さすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のやうに、唯もがいてばかりをりました。

ところが、或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかかるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。こ

打つて（打ちて）

の絲に縋り付いて、どこまでも登つて行けば、きつと地獄から脫け出せるに相違ない。いや旨く行くと極樂へはひることさへ出來るかも知れないぞ。さうすれば、針の山へ追ひ上げられることもなくなるし、血の池に沈められることもある筈はない。

かう思ひましたから、犍陀多は早速その蜘蛛の絲を兩手でしつかりと摑みながら、一所懸命に上へ上へと手繰りのぼり始めました。元より大泥坊のことでございますから、かういふ事には昔から慣れ切つてゐるのでございます。

然し、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られ

焦つて（焦りて）

草臥

絡

ません。稍暫く登る中に、とうとう犍陀多も草臥れて、もう一手繰も上の方へは登れなくなつてしまひました。

そこで、仕方がございませんから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。すると、一所懸命に登つたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか闇の底に隱れてをりました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分で登つてゆけば、地獄から脫け出すのも存外譯がないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲に絡みながら、ここへ來てから何年にも出したことのない聲で、「しめた、しめた」といつて笑

攀ぢ。

ひました。

ところがふと氣が附きますと、犍陀多の絲の下の方には、數限もない罪人たちが、自分の登つた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢ登つて來るではございませんか。

犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くはただ馬鹿のやうに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしてをりました。自分一人でさへ切れさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう、若し萬一途中で切れたと致しましたら、折角ここまで登つて來たこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落し

に落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底から、うようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を一列になりながら、せつせと登つて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに切れて落ちてしまふに違ありません。

まんなか
まなか（眞中）

そこで、犍陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども、この蜘蛛の絲はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けて登つて來た。下りろ、下りろ」と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲

獨樂

が、急に犍陀多のぶら下つてゐる處から、ぷつりと音を立てて切れました。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくる廻りながら、犍陀多は見る見る中に闇の底へ眞逆樣に落ちてしまひました。

後にはただ極樂の蜘蛛の絲がきらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

お釋迦樣は極樂の蓮池の緣に立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顏をなさりながら、又ぶらぶらお歩きになり始めました。

罰　墮　貪著　蕚

芥川龍之介　小説家。東京の人。東京帝國大學英文科出身。昭和二年七月歿す。（一八五五二年—一八八七年）

自分ばかり地獄から脱け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當の罰を受けてもとの地獄へ墮ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思し召されたのでございませう。

然し、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には貪著致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のお足のまはりにゆらゆらと蕚を動かしてをります。そのたんびに眞中にある金色の蕊からは、何ともいへない好い匂が絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂も、もう正午に近くなりました。（芥川龍之介—傀儡師）

大伴家持　武將にして歌人。大納言旅人の子。光仁、桓武の兩朝に仕へ、持節征東將軍に至る。（一一四四五年）うみゆかばの歌萬葉集に出づ。

二〇　武士道

武士道といふ言葉は、武士といふ一つの階級の間に發達したものの名であるが、その由來するところは甚だ古い。既に上古に於いてその淵源を認めることが出來るのである。即ち大伴家持が詠んだ歌に、

うみゆかばみづく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ、かへり見はせじ。

といふのがある。これは大伴氏の祖先から代代いひ傳へて來たところの家訓、陸に在つても海に在つても、天皇の爲に仕へて來た、神武天皇から千四百年を經て奈良朝時代、家持

までいひ傳へて來たところの家訓を、歌に現したものである。さうして又その一族の者に與へた長歌には、大伴の家は神代より以來、事ある毎に武事を以て勳功を立てた家で、代代の天皇に赤き心を捧げて仕へて來た家である、さやけく清く明かなる名をもつて來た軍功のある家である。後の龜鑑ともなるべきものであるから、その清き名を汚すことなきやうに、先祖の名を辱かしめないやうに心がけるべきであるといふことを述べ、その終に短歌を添へて、その先祖より天下に名高く、さやけく清く明かなる名を汚さず、ますます劍太刀を研ぎ磨いて、その忠勤を勵むやうにと述べてゐる。

一族の者に與へた長歌　萬葉集に出づ。

短歌を添へて　劍たちいよよ研くべし古ゆさやけく負ひて來にしその名ぞ。

この武勇忠節の精神は、武家が起るに至つて、平安朝の末から鎌倉時代に發達して、堅實なる國民的精神となつた。それが所謂武士道である。この武士道といふ精神が、次の時代すなはち室町時代を通じて、國民の間に更に根深く植ゑつけられ、江戸時代に至つてはそれが立派に形式化して、いささか型にはまつたといふ嫌はあるけれども、尙上下の階級に普く廣まつて、平民、町人の間にもその影響を及ぼし、江戸兒氣質を產んだ。江戸兒氣質といふものは一種の武士道である。

然らば武士道とはどんなものであるか、これを解剖して見ると種種の要素を含んで居るやうに思はれる。まづ武士

含んで（含みて）

直截
打算
然諾

といふものは、全體の行動、その働に於いて實際的であることを尊ぶ。平安朝の公家衆は、實際的でなく、理想を主として居つたが、武士はこれに反して理窟ぬきで實際に行ふ、不言實行である。又すべてが質素である。質素である爲に何事も簡易であり簡單である。簡單であるが故に物事が直截である。故にまた正直であり、掛値をいふやうなことはなく、ありの儘である。卽ちまた廉潔ともいふべきである。またそれが打算的でないともいへる。懸引はしないのである。故に勘定づくでない。廉潔であり、打算的でないからして、信義を尊ぶのである。信義を尊ぶが故に然諾を重んずる。宜しいと引き受けると、如何なる事であつても後へは退かない。

重んずる（重みする）
犧牲
名こそ重けれ
頽廢

又主從の義を重んずる。人の臣下になつて主と仰ぎ臣下とならうと約束したら、その義は變へない。故にまた犧牲的精神に富む。そこで名を重んずるのである。武士といふものは名こそ重けれで、死しても名を重んずる。故にまた勇氣を尊ぶ、卽ち死を輕んずる。武士道の要素はまだ種種あるであらうが、大體を申してみると、そんなものである。實際的であり、質素であり、直截であり、正直であり、廉潔であり、打算的でない。信義を重んじ、然諾を重んじ、主從の義を堅くし、勇氣を重んじ、死を輕んずる。

この武士道は江戸時代の末に至り、年を經る間に、實質が衰へ、頽廢し沒落してしまつたけれども、その精神といふも

のは一般國民の間に廣められた。武士道といふ言葉は武士の間に限られたものであるけれども、その精神は武士の間ばかりの道德ではなく、廣く一般の國民的精神となつた。さうして明治になつて、その精神を要約して、國民の歸趨を示されたものが卽ち五箇條の敕諭であつて、これが軍人の精神であると同時に、やがてまた國民的精神であらねばならぬのであると思ふ。（辻善之助―皇室と日本精神）

歸趨

五箇條の敕諭　明治十五年一月軍人に下賜せらる。

辻善之助　東京の人。文學博士。東京帝國大學教授。帝國學士院會員。東京帝國大學國史科出身。明治十年生まる。

おもしろの春雨や、花の散らぬほど。おもしろの儒學や、武備のすたらぬほど。おもしろの武道や、文學を忘れぬほど。おもしろの酒宴や、本心を失はぬほど。おもしろの遊藝や、辱をとらぬほど。おもしろの利慾や、理義の道のふさがらぬほど。（小早川隆景）

二　膽力の養成

男子と生まれた以上は、死生の境に出入しても、從容自若として更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ懸つても、悠悠と澄ましてゐるが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちても、膽を冷し色を失ふではないか。

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潛伏しながら眠つて居たとか、德川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に往つて死人の首を取つて來た

上杉謙信　天正六年歿す。（一一九〇年―一二三八年）

德川光圀　水戸藩主。頼房の子。義公と諡す。元祿十三年薨ず。（一二八八年―一三六〇年）

ネルソン　英國海軍の名將。トラファルガーにフランス艦隊を破る。（西曆一七五八年—一八〇五年）

武田信玄　天正元年歿す。（二一八一年—二二三三年）

とか、ネルソンが幼時から恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆天稟と見るべきものであるが、修養で剛膽の人となつた例も亦決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ名代の卑怯者があつた。信玄はどうかしてこれを矯正しようと考へて、或日の戰に彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢丸は雨のやうに飛んでくる。砲聲は雷のやうに轟く。彼はその怖しさに殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし幸にも一つも矢丸が中らなかつた。そこで彼は飜然として、運さへあれば矢丸も中らない、死は決して畏るべきものではないと悟つて、それからは戰爭ごとに勇み戰つて、遂に武名を揚げたといふことである。

向つて（向ひて）

悟つて（悟りて）

戰つて（戰ひて）

大藏左衞門が戰を恐れたのは、彈丸雨飛の危險を過大視したからである。危險、災害の身に迫つた時、直ぐにその結果を過大に豫想して恐懼狼狽するのは、神經質な人ほどあり勝のことである。ところが、平素修養あり、經驗あるものは、決して恐懼狼狽することはない。消防夫が炎炎と燃えあがる猛火の中に泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に自由に働くのも、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく多くの鍛錬と經驗とを積むことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふことが必要である。危險、災害等

依つて（依りて）

の來る場合に、なるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却つて怯懦に陷ることがあるものである。最も悪い結果を身に引き受けても是非に及ばぬと覺悟すると、膽は自然にすわるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて敵の命を取るといふ風に、死身になつた上で手段と技倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりも自由が利くから、自然數倍の働をすることが出來る。

勝安芳

勝海舟は膽力に富んだ人で、白刃を踏みながら、談笑の間

却つて（却りて）

勝海舟　名は安芳。伯爵。舊幕臣。海軍卿を經て樞密顧問官となる。明治三十二年一月薨ず。（一二四九三年—一二五五九年）

に天下の大事を決した英傑であるが、みづからその膽力を禪學と劍術とに依つて養成したものと信じて、左の如く語つて居る。

「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業したが、德川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。度度刺客かなんかに脅されたが、何時も手取にした。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれたのだ。危險に際會して逃げられぬ場合には、まづ身命を捨ててかかつた。さうして不思議にも死ななかつた。ここに精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し胸跳り措置顚倒し、進退度

勝たう（勝たん）

措いて（措きて）

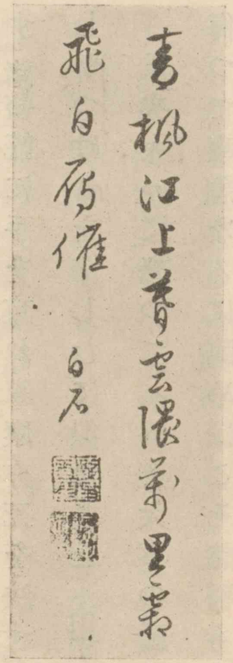
嘉納治五郎　教育家、柔道家。兵庫縣の人。萬延元年十月生まる。元東京高等師範學校長。講道館長。貴族院議員。

を失するやうな患が生ずる。又遁げて防禦の位置に立たうとすると、忽ち畏縮の氣が生じて相手に乘ぜられる。大小の事、皆この規則に支配せられるのだ。自分はこの精神上の作用を悟つて、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虚心坦懷で事變に處した。それで、小にしては刺客、亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽綽として餘裕あることが出來た」と。

海舟は、主として劍術と禪學とで膽力を錬磨したのである。理窟の上から膽力を養成することは容易でないが、實地の修業において膽力の錬磨せられることは、殆ど人の想像以上である。（嘉納治五郎―青年修養訓）

徳川殿　家康をいふ。

青楓江上暮雲隈萬里霜飛白雁催　白石



新井白石筆

三二　鬼作左

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふもの出で來て、既に危く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その驗なく、ただ弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召し集めて、御あとの事ども仰せ置かる。人人の周章いふに及ばず、土民百姓等に至るまで、その程程に隨ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

重次　本多重次。通稱作左衛門。三河の人。勇猛にして鬼作左の稱あり。慶長元年歿す。（一一八九年―一二五六年）

臨めばこそ―術盡きぬれ

重次御枕に取りつきて泣く泣く申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔この病を受けしに、たちどころに驗を得し良醫の候ふ。彼を召して見せ試み給ふべし」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。この上醫療その詮なし。かつは命を惜しむに似たり」とて用ゐ給はず。

重次大いに怒つて、「かほど大事の腫物輕輕しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それに又良醫して治し參らせんとするを用ゐ給はず、亡せ給はんこと、御心からとはいひながら、あつたらしき命かな。」「諸醫、術盡きぬ」と申す上は、彼いかでか治し參らすべき。年老いたる重次が御あとにさがつての御供協ふべからず。さらば御先へ

乞うて（乞ひて）

見苦しい。（見苦しき）

えこそ―止めね

頼りにこそ―死すべけれ

參らん」とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ」と仰せければ、近く侍ふ人人走り出で引き留め、「仰せらるべき旨あらせられ候ふ」といふ。重次大いに聲を怒らして、「最後の暇乞うて罷り申すものを、見苦しい殿ばらの止めやうや」と罵つて出でんとす。「されば候ふ。その人を止めよとの御使に、『えこそ止めねと申せ』とは、おとなしくも候はぬ本多殿」といはれて、「げにさも候ふ」とて御前に參る。

徳川殿、「汝は物に狂ひてかくはいふか、家康いまだ死し果てぬに。縱ひ家康が命終るとも、汝等が世に在らんを頼りにこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして一日も世に殘りて、

事やーある

若き者ども捉して我が家の絶えざらんやうを計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある」と仰せければ、「いや、いや、それは人によりての事に候ふ。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず。犬死せん人の御供、その詮なし。重次若年の昔より此處彼處の軍に從ひて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに餘つて、世に交らんこと協ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に畏れられも敬はれもしつれ、殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、まづ御壻の北條殿、我が國國を取らんとし給はんに、若き人人が行末久しう仕へんと賴みきつたる主に

情深ければこそ―敬はれもしつれ

御壻の北條殿　北條氏直。

踵をめぐらす

譜代

何事か―過ぎ候ふべき

たちまち別れて氣おくれし、はかばかしき矢の一筋を射出だすことも協ふべからず。當家滅ぼされんことまた踵をめぐらすべからず。重次それまでながらへて、『あの年寄つたるかたはものは德川殿の譜代にて、何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なればかく世に恥をさらすらん』と、うしろ指さされんこと、老の恥何事かこれに過ぎ候ふべき。この頃までも武田の家の人人御當家へ召されて、さらぬ人にも手を下げ腰をかがめしを、世にもあはれに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候ふと存ずれば、殿

德川家康

におくれまゐらせんが悲しきばかりにも候はず、我が身のはてもあさましきによつて、御先に死することにて候ふ」と申す。

ことわり

「汝がいふところ、ことわり至極せり。さらば醫療のことは汝が心に任すべし。天命すでに到りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日たりとも生き殘つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで仰をや背くべき」と申す。「さらば醫師召させよ」とて召さる。

仰をや背くべき

醫師やがて參つて、「御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾を取つて据う。御灸の痛みを覺えさせ給はねば、艾を增し加ふること多くして後、いささか痛ませ給ふよし仰せければ、御藥をつけてまゐらせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに御腫物潰れて、御惱たちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲をかぎりに泣く。御前伺候の人人も感涙を共に流しけり。（新井白石―藩翰譜）

新井白石　江戸時代の學者。政治家。名は君美。六代將軍家宣を輔佐して功績多し。享保十年五月歿す。（一三一七年―一三八五年）

剛はよく剛毅にして物に屈せざるをいふなり。操は我が義とする志を守つて少しも變せざる心なり。大丈夫この心を存せざれば、我が好惡する所において必ず屈しやすく、義を守るところたしかならざるなり。故に剛操を以て信を立て義を堅くするを行とするなり。清廉正直も剛操を以てせざれば立たず。況や士たるの道、常に剛毅を以て質とし、その守る所を變せざるを以て行とす。（山鹿素行）

芬　藪

ことこそ―候へ

二三　人の香

昨日、或席上にて一場の談話を求められ候ひしまま、「人の香」といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんことを人人に求め候ひき。今、茲に少年諸君の爲に、更にこの趣旨を開陳致したく候。

山野に花卉少からずと申せども、香芬あるものは多からず。しかも香芬あるものは、藪澤の中にありとも人のために認めらるべく候。これと同じく、人も亦香氣あるものとならんことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、その才智藝能に伴ふところの崇高なる精神を申すにて

眇

君子は獨行影に恥ぢず　宋史に出でたる語。

候。苟もこれあらんか、その事業の大小を問はず、必ず生命あり、色彩ありて、人を動かし人を感ぜしめ、人に認めらるべく候。

さて人の香氣は何より來るかと申し候に、自敬の念より來ることを忘るべからず候。自敬とは、みづから尊大に構ふる譯にてはこれなく、自己が自己に對して敬意を表することに候。この身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たるこの身も、天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば如何なる働を爲さんも知るべからず候。然るに、目前の劣等なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは恥しき限に候。「君子は獨行影に恥ぢず」と申

君子は惡木の蔭に宿らず　管子に、「士懷レ耿介之心一、不レ蔭二惡木之枝一」。

阿新丸　日野資朝の子。年十三にして、父の仇本間三郎を討つ。

すも、「君子は惡木の蔭に宿らず」と申すも、皆同じ意義にて、おのれを敬ふ念より出でたる語に候。

昔、アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申し出でたる者ありしに、大王これを却けて、「朕は勝利を盗まず」と申され候ひき。又阿新丸が父の仇を討ちける時、まづその枕を蹴て目を醒まさしめて後、これを擊ち候ひき。古今戰勝の將軍、復仇の子少からざる中に、是等の人のみ多く語り傳へらるるは何故なるかといふに、その所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。

近來、「我は如何にして富を作れるか」といふが如き俗惡成功談の傳へらるるが爲に、少年を誤ること少からず候。小生は少年諸君が一時體裁よく暮らすといふやうなる投機談に迷はず、唯その才智藝能によりて、精神あり香氣ある生活を營まんことを希望致し候。香氣ある人は、世間必ずこれを認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。

以上は平凡の語には候へども、小生が平常家兒輩に語りをるものに候へば、無難にして間違なきことだけは確信致し候。小生は少年諸君が、退いて右の香氣を養はれんことをひとへに希望することに候。

（竹越與三郎―讀畫樓閒話）

退いて（退きて）

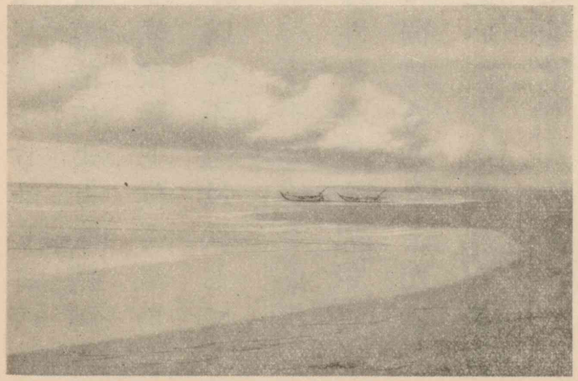
竹越與三郎　貴族院議員。三叉と號す。新潟縣の人。慶應元年十月生まる。

九十九里の海岸　千葉縣夷隅郡大東崎より海上郡飯岡に亙る海濱の稱。

二四　初秋海濱記

九十九里の海岸に來て、沼や川や磯を毎日飛び廻つてゐると、頭が潮風にふやけてしまつて、仕事は一向にはかどらず、一日一日をぼんやり過してゐるうちに、もういつか初秋になつてゐた。

初めはただ葦の茂みをさらさらと渡る涼風だけだつたが、それに氣付いて見廻すと、空の色、海の



九十九里濱一ノ宮海岸

色、蟬の聲、蟲の聲、凡てが秋の氣を帶びてゐた。そして海濱の松林の中に孤立した旅館では、滯在客がいつの間にか歸つてしまつて、家の人以外には私一人置き忘れられたやうに、ぽつねんと居殘つてゐるのだつた。

廣廣とした平地の海濱には、夕方の薄明りがない。日のあるうちはぱつと明るいが、その日が見る見るうちに西の地平線に沈んでしまふと、すぐにとつぷりと暮れてゐる。それと同じに、夏と秋との間に薄明りがないといへば變だけれど、ぎらぎらした夏から澄み切つた秋へと、一飛びに季節が移つてゆく。少くとも私はさう感じて、廣いがらんとした室の中に、驚いて眼を見張つたのだつた。

秋の突然の訪れは人の心をしみじみと落ちつかせる。私は初めて夜遅くまで机に向つて仕事をした。それに疲れてくると、何となく眠るのが惜しまれて、書物を出して讀み耽つた。いろんな種類の小さな蟲が、一枚締め殘した雨戸の口から、電燈の光を慕つて飛び込んで來る。それが電燈のまはりから机の上一面に渦卷き撒き散らされる。不思議なことには蚊は一匹もゐなかつた。

蟲が書物の間に挾まらないやう注意しいしい頁を繰つてゐると、ふと雨滴の音が耳についてきた。遠くごうつと地響きをさせ、近くさあつと捲き返してる二樣の波音の間に交つて、そして金屬性の蟲の聲の合間に、ぽたりぽたりと軒

耽

交つて（交りて）

から砂の地面へ落ちる雨滴の音が、はつきりと聞えてゐる。

私はその音に耳を貸してるうちに、變にいぶかしい氣持になつて、開いてる雨戸の間から覗きに立つて往つた。空には一面に星が輝いてゐて、雨の氣配は更にない。をかしいなと思ふ心が働くと共に、私はもう下駄を突つかけて縁側から庭に降り立つてゐた。

爽かな、そして露つぽい夜だつた。月のない空には、あらん限の星がきらきら輝いて、南から北へ走る茫と仄白い銀河を中心に、低く高く懸つてゐる。その一つ一つが暗い空のなかにはつきり浮き出して冴え返つて、見つめてゐると氣が遠くなるほど、無限の距離に散らばつてゐる。そしてその光

貸してる（貸してゐる）

開いてる（開きてゐる）

立つて（立ちて）

濺いで（濺ぎて）
濕つて（濕りて）
はひつて（はひりて）
糠

に乘つて殆ど感じられない何かが、銀線の震へのやうなものが一面に地上へ降り濺いでゐる。氣が付いてみると、地上にはしつとりと露がおりて、芝草の葉は重く垂れ、砂は深く濕つてゐる。軒から落ちる雨滴と聞いたのは、屋根にたまつて滴る露の雫だつた。

再び室の中にはひつても、私は書物を伏せたままにして軒端の露の雫に耳を傾けてゐた。ぽたり――ぽたり――と丁度糠雨の降る時のやうな雫の音で、それが大きな波音の間間にしめやかな釘を打ち込んでいく。私はいつまでもぼんやりして、蟲の聲と雫の音とに無心に聞き入つてゐた。

翌朝眼を開いた時、室の中には電燈がともつてゐたが、そ

緣側
濛
罩
白んで（白みて）
屯

の光に交つて隅隅まで茫とした妙な明るみがあつた。半身を起して眺めると、締め忘れた雨戸の間から白白とした夜明の微光が見えた。

盲ひたやうな、をかしな夜明だと思つたが、緣側から眺めると、それは深い霧のためだつた。南寄り東に海を受けたその海の面に、濛濛とした霧が低く立ち罩めて、水平線を離れたらしい太陽の光がそれに漉されて茫と白んで、宛も磨硝子を透して見るやうな明るみとなつてゐた。そして不思議な景色を展開してみせた。

先づ海の方一面に低く霧が屯してゐる。それから右手の方川の流に隨つて、川口から川上へと霧の枝が伸び出し、松

蔽うて（蔽ひて）
仄
くらゐ。
たるんで。（たるみて）

林の裾を廻つて見えなくなり、更に左手へは川口から入江の沼の上をくつきりと蔽うてゐる。それらの霧と青い空と黑黑とした松林との間は、すべて仄白い明るみで、そよとの風の流もない。そして一面に露の玉が眞珠の色をなして結ばれてゐる。殊に庭の小松の上には、枝といふ枝に皆露の玉をつらねた蜘蛛の巣が、きらびやかに懸つてゐる。

私は驚いてその蜘蛛の巣を眺めた。今まで氣付かなかつたのが不思議なくらゐ、松一杯に蜘蛛の巣だつた。庭の松ばかりでなく、傍の小松の原も皆さうだつた。蜘蛛の姿は見えないが、徑二尺くらゐのから掌の大きさ程のまで大小さまざまの網目が、綺麗に露をつらねて重くたるんでゐる。

太陽はなかなか昇りさうにない。霧は動かない。蜘蛛の巣も動かない。私もぢつと佇んでゐた。

やがて霧は一面に濛濛と湧き返つて、それが次第に空へ昇つてゐる。そして鋭い朝日の光が、いつしか横樣に直射して、蜘蛛の巣の露は消え、その下の叢から蟲の聲が斷續し、裏の松林の中には晴れやかな小鳥の聲が響いてゐた。

霧は間もなく空中に消え去つて、沼の彼方の砂濱には、海鳥の群が舞ひ飛んでゐた。今日もやはり大漁らしい。方方で地引網の曳子を呼び集める喇叭が鳴つてゐる。

（豐島與志雄―書かれざる作品による）

豐島與志雄　佛文學者。福岡縣の人。法政大學教授。東京帝國大學佛文科出身。明治二十三年十一月生まる。

二五　滿洲國の我が移民村

トラックは六時近くに、ちよつとした百姓家の集まつた所に來た。

「これが永豐鎭です」といはれて、私は餘りの小部落にあつ氣に取られた。しかし私は目的地に著いた喜で一杯であつた。私達は本部前で降りた。本部は三百坪ばかりの地面に、周壁をめぐらし、中庭をとつて、その周圍に凹字形に建てられた百姓家であつた。建坪は百坪もあるであらう。滿洲國一流の建方の低い家である。面窶れした男が、戸口で私を迎へてくれた。これが農事指導員山崎君であつた。

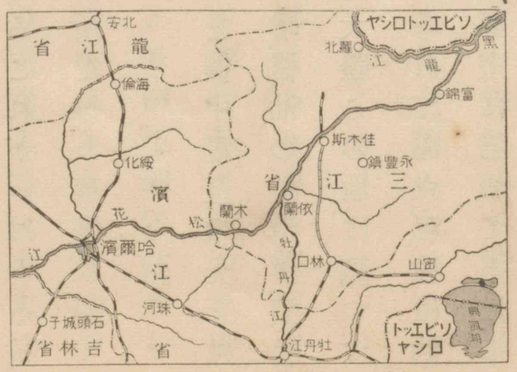
永豐鎭　滿洲國三江省。

山崎君　名は芳雄。

椅子

私は案内せらるる儘に、一番奥の幹部室に這入つて行つた。幹部室も他の部屋と同じ大きさで、約十二三疊もあるであらう。三疊ほどが床を張つて寢床となり、殘の土間に机や椅子が竝べられてゐた。部屋の感じは、日本の百姓家の内部と大した相違はない。

私はなほ薄明りのある間に、部落の外形でも頭に入れて置きたかつた。山崎君を促して外に出た。茫茫たる野原の中に、十間幅ほどの、空地とも道路とも付かぬ廣場の兩側に、ぽつんぽつんと、田



舍家が數十軒建つてゐる。そのうちの七八軒ほどが屯墾團の用舍、他の家が土民の住居である。本部の塀の外側に、新しい和洋折衷の家が數軒建てられてゐる。これがいはゆる試驗家屋や集合家屋である。和漢洋の長所を採り、移民に適するやうに工夫したのださうだ。

折衷

私達ははや暗くなりかけてゐる中を、懷中電燈の光をたよりに、用舍の中を一一見て廻つた。味噌、醬油の製造所、製粉場、製麥麵場、油房、醫院、鍛冶場、蹄鐵所等、大體この地に籠つて自給自足の出來るやうな設備が整へられてゐた。私達は約一時間もこれらの設備を見廻つて、幹部室に歸つて來た。市川隊長も丁度歸つて來た。そして私の來訪を心から歡迎してくれるのであつた。私達が語り續けてゐる時、食事の用意が出來たことを知らせて來た。私達は本部を出て、向側の食堂の家に行つた。

味噌
醬油

滿洲風俗

食堂は十坪ばかりの支那家屋を打ち拔いて設備してあつた。細長い机とベンチが二列に竝べられてある。小さいランプが二つついてゐた。机の周圍には、三十人ばかりの人が著席してゐる。珍しい客として、一齊に私は見返された。横の方には、大きな釜が三

贅澤　辯

箇据ゑ付けてあつて、一つには汁のやうな物がぶつぶつと沸いてゐた。私と隊長とは一隅に向ひあつて坐つた。軍隊用の食器に盛り切つた飯と汁とが運ばれた。飯は白米七八割に粟を混じたもので、副食物は豚汁のやうなごつた煮であつた。それは丁度軍隊の食事を想像すればよい。

「今晩の食事は少少贅澤なんです。昨日は彌榮神社の落成式でして、まだお祭氣分が抜けないものですから」。

市川隊長は辯解らしい説明を加へるのであつた。私等は食事を終へて、また元の幹部室に歸つて話を續けた。

しかし、私は明日の視察のプログラムを考へては、餘り夜更しする譯には行かなかつた。すでに時計は十一時に近か

棟　惹

つた。私は私の寢床に當てられた別棟の家に案内された。それは八疊ほどの部屋であつた。この部屋は傳令班の部屋であつた。隅の方には本立が二つ立ててあつた。「醬油の作り方」とか、「多角農業」とかいふ實際的のものに交つて、文藝物や、「新しい村」などいふ本が收められてゐた。私は移民の教育程度の案外高いのに心を惹かれた。

私は翌朝六時に目を覺ました。朝の溫度は零下三度であつた。日本ならば堪へられぬ寒氣だが、此處では我が國の晩秋の感であつた。溫度と寒氣の關係は、我我の經驗で律する譯には行かぬことを知つた。朝食を終へて、山崎君と二人で、馬で農場視察に出掛けた。馬の速度につれて、澄み切つた秋

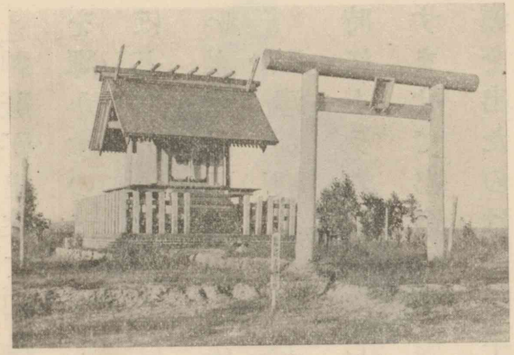
やにはに　蝕　穀

の空氣が剛柔こもごも頰をなでた。孟氏崗の起伏するなだらかな丘の間を縫うて、私等は彌榮神社に向つた。馬の驅けるにつれて、やにはに脚下から雉が飛び立つのは愉快でもあるが驚かされもした。農場は處處蝕まれたやうに耕されてゐた。其處には大豆や小麥が幹についたまま野積みにされてゐた。

「冬ごもりの用意を急ぐのと、穀倉の準備が出來てゐないのとで、野積みのままにしてあります。隨分鳥に荒らされるのですが、どうにもなりません。もう嚴冬が迫つてゐるんですから」と山崎氏は說明する。かやうな原を十町も驅けた頃、私達は小さい丘の上に出た。山崎氏は遙かの小丘の上の小

吉林

さい建物を指して、「あれが彌榮神社です」と勇ましげに敎へるのであつた。



彌榮神社

神社は丁度農場の中央に建てられ、ここからは農場の全景が一望の内に收められる景勝の地である。私達は神社に禮拜した。異鄕で拜する神社は一入の感激を私達に與へる。農場に鄰接する吉林の森林地帶から伐り出した眞新しい白木の社殿は、淸楚そのものである。土臺の花崗岩を始め、すべてが農場の附近から集められ、團員によつて

作られたもので、しかも極めて立派に出來上つてゐた。

「神社が出來て、團員の氣が引き締りました」と山崎君は眼を輝かすのであつた。民族的信仰の表徴、それが異鄕でどれほどの力强さを團員に與へるであらうかは想像に難くない。私は眼頭の熱くなるのを覺えた。

私達が鞭を揚げて本部に歸つたのは正午過であつた。一時にトラックを出してくれる筈であつたので、急ぎ晝食をすませて出發の準備をした。隊の人人に別れを告げて、永豐鎭を出たのは一時半頃であつた。（岸井壽郎―滿洲の我が移民村）

わが車いつしか高き街に出で松花江みゆ楡の陰より　與謝野寛

鞭

岸井壽郎　東京日日新聞社營業局次長。神奈川縣の人。東京帝國大學英法科出身。明治二十五年生まる。

二六　歌話

一、とりゐ阪

松平定信

白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはしし頃、麻布鳥居阪なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類燒しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、燒死せしもの多かりしかば、

この火事は人の命をとりゐ阪
これより上のとがはないぜん

白河樂翁公　松平越中守定信、磐城國白河の城主。後、老中となる。文政十二年五月卒す。（一七四一―一八年―二四八九年）

田安邸　江戸城田安門内にあり。定信は田安宗武の次子。

戸川内膳　幕府の旗本。

奥醫師　徳川幕府の醫官。將軍の診候醫藥の事を掌る。

梅檀の二葉　諺に「栴檀は二葉より香し。」

とぞいふべき

延享　櫻町天皇の御代。

と落首せるものありけり。近侍の人人興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんにはさはいはじ」とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ」と問ひまゐらするに、「いはじ、いはじ」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我のことなり』といふべきなり」となり。

一句のことにて一首の意味を全く顚倒せしめ、過ちのやみ難きに出づるを明かにせられしこと、誠に「栴檀の二葉」とぞいふべき。

二、あがたの宿

延享のある年の秋、江戸大風雨にて、市中ところどころの

狼藉

會釋

中村秋香　静岡縣の人。御歌所寄人。明治四十三年歿す。（二五〇一年―二五七〇年）

天明　光格天皇の御代。火災は天明八年のこと。

人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机によりて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな」といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧みて會釋しつつ、「この嵐にて一首出で來ぬ」とて書きて示しける歌、

野分してあがたの宿は荒れにけり
月見に來よとたれにいはまし

（中村秋香―新說歌がたり）

三、沖つ白波

天明大火の後、小澤蘆庵は京外の太秦に假住居してあり

安壽と厨子王　（原田千里筆）

小澤蘆庵　京都の歌人。名は玄中。別に觀荷堂と號す。享和元年七月歿す。（一三八三年—一四六一年）

太秦　今は京都市右京區に入る。

菅茶山　儒者。名は晉帥、字は禮卿。通稱太中。備後神邊の人。文政十年八月歿す。（一四〇八年—一四八七年）

けるが、或夜ぬす人ども來りて、翁の家の遣戸をこじ開けて入らんと窺ひたるを、翁早くも氣づきて、身には腹卷を著、右の手に長刀を拔きもち、左の手に手燭執りて、ぬす人ども入らば斬らんの勢を示しつれば、ぬす人ども入りかねて歸りぬ。その明日の夜も來りぬれど、又おなじ態にてあるに、流石のぬす人もあきらめてか、遂に來ずなりぬるまま、

小澤蘆庵

ありそみの巖こごしみ越えかねて
よるよるかへる沖つしらなみ

（菅茶山—筆のすさび）

二郎　山椒太夫の子息。

藁搗

厨子王・安壽　村上天皇の天暦の頃、陸奥の大守たりし岩木判官正氏の子。

二七　厨子王その一

水がぬるみ草が萌える頃になつた。あすからは外の仕事が始まるといふ日に、二郎が邸を見廻るついでに、三の木戸の小屋に來た。

「どうぢやな。あす仕事に出られるかな。大勢の人の中には病氣で居るものもある。奴頭の話を聞いたばかりでは解らぬから、けふは小屋小屋を皆見て廻つたのぢや。

藁を搗つてゐた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、この頃の様子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。

「それについてお願がございます。私は弟と同じ處で仕事が致したうございます。どうか一緒に山へ遣つて下さるやうにお取り計らひなすつて下さいまし。

赫いて（赫きて）
往きたい。（往きたし）
訝
睜

蒼ざめた顏に紅がさして目が赫いてゐる。厨子王は姉の樣子が二度目に變つたらしく見えるのに驚き、また自分に何の相談もせずにゐて、突然柴刈に往きたいといふのをも訝しがつて、只目を睜つて姉をまもつてゐる。二郎は物もいはずに安壽の樣子をぢつと見てゐる。安壽は

「外にない只一つのお願でございます。どうぞ山へお遣りなすつて」と繰り返していつてゐる。

暫くして二郎は口を開いた。

重い。（重き）
垣衣
山椒大夫の家にて安壽を稱せし名。
かういつて（かくいひて）

「この邸では奴婢のなにがしに何の仕事をさせるといふことは、重い事にしてあつて、父が自らきめる。然し垣衣、お前の願はよくよく思ひ込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにしてやる、安心してゐるが好い。まあ二人の稚いものが無事に冬を過してよかつた。

かういつて小屋を出た。

厨子王は杵を措いて姉の側に寄つた。

「ねえさん、どうしたのです。それはあなたが一緒に山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出しぬけに賴んだのです。なぜわたしに相談しません。

姉の顔は喜に輝いてゐる。

「ほんにさうお思ひなのは尤だが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、賴まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひ附いたのだもの。

賴まう。（賴まん）

「さうですか。變ですねえ。

厨子王は珍しいものを見るやうに、姉の顔を眺めてゐる。

奴頭が籠と鎌とを持つて這入つて來た。

「垣衣さん。お前に汐汲をよさせて、柴を刈りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と杓とを貰つて往かう。

貰つて（貰ひて）

往かう。（往かん）

「これはどうもお手數でございました。

安壽は身輕に立つて桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ歸りさうにはしない。顔には一種の苦笑のやうな表情が現れてゐる。この男は山椒大夫一家の者のいひつけを神の託宣を聽くやうに聽く。そこで隨分情ない苛酷な事をもためらはずにする。然し生得人の悶え苦しんだり、泣き叫んだりするのを見たがりはしない。物事が穩かに運んで、そんな事を見ずに濟めばその方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は、人に難儀をかけずには濟まぬと諦めて、何かいつたりしたりする時に現れるのである。奴頭は安壽に向いていつた。

山椒大夫　由良の石浦にゐた長者。

生得

悶

勝手

諦

向いて（向きて）

「さて今一つ用事があるて、實はお前さんを柴刈にやる事

なさつた（なされた）
三郎　山椒大夫の子息。
貰うて（貰ひて）

は、二郎様が大夫様に申し上げて拵へなさつたのぢや。するとその座に三郎様がをられて、『そんなら垣衣を大童にして山へ遣れ』と仰しやつた。大夫様は『よい思附ぢや』とお笑ひなされた。そこでわしはお前さんの髪を貰うて往かねばならぬ。

傍で聞いてゐる厨子王は、この詞を胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安壽の顔からは喜の色が消えなかつた。

「ほんにさうぢや。柴刈に往くからはわたしも男ぢや。どうぞこの鎌で切つて下さいまし。

安壽は奴頭の前に項を伸ばした。光澤のある長い安壽の

付

かうして（かくして）

髪が、鋭い鎌の一搔にさつくり切られた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌をさして、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の處に來てから、二人一緒に歩くのはこれが始である。

厨子王は姉の心を忖りかねて、寂しいやうな悲しいやうな思に、胸が一杯になつてゐる。昨日もいろいろに詞を設けて尋ねたが、姉は一人で何事か考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王は悚へかねていつた。

「ねえさん。わたしはかうして久し振で一緒に歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてな

りません。わたしはかうして手を引いて居ながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。ねえさん、あなたはわたしに隱して何か考へてゐますね。なぜそれをわたしにいつて聞かせてくれないのです。

安壽は今朝も毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を輝かしてゐる。然し弟の詞には答へない。唯引き合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする處に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縱横に亂れてゐるが、道端の草には、黃ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の涌く處がある。そこを通

毫湛

り過ぎて岩壁を右に見つつ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面にさしてゐる。安壽はかさなり合つた岩の風化した間に根をおろして、小さい菫の咲いてゐるのを見付けた。そしてそれを指さして厨子王に見せていつた。

「御覽。もう春になるのね。」

厨子王は默つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかりを抱いてゐるので、とかく受答へが出來ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立のあたりに來たので、厨子王は足を

咲いて（咲きて）

頷

駐めた。

「ねえさん、ここらで刈るのです。

「まあもつと高い處へ登つて見ませうね。

安壽は先に立つてずんずん登つて行く。厨子王は訝りながらついて行く。暫くして雜木林よりはよほど高い、外山の項ともいふべき處に來た。

石浦　京都府加佐郡由良町字石浦。山椒大夫の屋敷迹といふがあり。

由良の湊　舞鶴と宮津との中間にある小港。

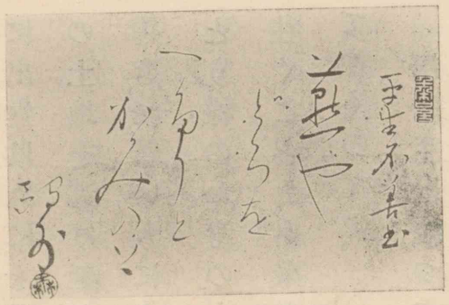
二八　厨子王その二

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向うに、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山にとまつた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。

大雲川　由良川ともいふ。福知山より來りて由良の港に注ぐ。

中山　大雲川の右岸。由良の南一里。

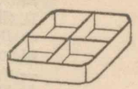
「わたしが久しい以前から考事をしてゐて、お前ともいつものやうに話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしのいふ事を好くお聞き。伊勢から賣られて來た人が、故郷からこの土地までの道をわたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれま



平生不レ善レ書（クセツ）
燕やどろをべ
たりとかみの
上
鴎外

森鴎外筆

恐しい。（恐しき）



樏子

傳つて（傳ひて）

す。おかあ様と御一緒に岩代を出てから、わたしどもは恐しい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へのぼつておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたおとう様のお身の上も知れようし、佐渡へおかあ様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。

厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。

「そして、ねえさん。あなたはどうしようといふのです。

烙

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一緒にする積りでしておくれ。おとう様にもお目に掛り、おかあ様をも島からお連れ申した上で、わたしを助けに來ておくれ。

「でもわたしが居なくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。

厨子王が心には烙印をされた恐しい夢が浮ぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分お前が居なくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の處で、わたしは柴を澤山刈

ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りていつて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。

かういつて安壽は先に立つておりて行く。厨子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておりる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上ものに憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

木立の處までおりて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。こ

附いて（附きて）

憑聰

の地藏様をわたしだと思つて、護刀と一緒にして、大事に持つて居ておくれ。

「でも、ねえさんにお守がなくては。

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと追手が掛ります。お前がいくら急いでも追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、追手が歸つて來たあとで寺を逃げてお出でよ。

さつき（さき）

和江　大雲川の左岸、中山の向ひ、由良の南約四粁。

「でもお寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。

「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隱してくれませう。

「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神樣か佛樣がおつしやるやうです。わたしは考を極めました。なんでもねえさんのおつしやる通りにします。

「おう、よく聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隱してくれます。

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。おとう樣やおかあ樣にも逢はれます。ねえさんのお迎にも來られます。

輝いて（輝きて）
汲んだ（汲みたり）
沿うて（沿ひて）

厨子王の目が姉と同じやうに輝いて來た。二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の涌く處へ來た姉は、櫟子に添へてある木の椀を出して清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ」。かういつて一口飲んで弟にさした。弟はこれを飲み干した。

「そんならねえさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに中山まで參ります。

厨子王は十歩ばかり殘つてゐた阪道を、一走りに驅けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。安壽は泉の畔に立つて、竝木の松に隱れ

登らう。（登らん）
樵

薙

ては又現れる後影を、小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸に今日はこの方角の山で木を樵る人がないと見えて、阪道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の追手が、この阪の下の沼の端で小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履物であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲にいつた。「これへ參つたのは

貰はう。（貰はん）

簇がつて。（簇がりて）

開けい。（開けよ）

石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人がこの山に逃げ込んだのを、たしかに認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰はう」。附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石畳が續いてゐる。その石の上には、手に松明を持つた三郎の手の者が押し合つてゐる。又石畳の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も殘らず簇がつてゐる。これは追手の群が門外で騒いだ時、内陣からも庫裏からも、何事が起つたかと怪しんで出て來たのである。初め追手が門外から「門を開けい」と叫んだ時、開けて入れたら亂暴をされはしまいかと心配して、開けま

いとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。然し今、三郎が大聲で「逃げた奴を出せ」といふのに、本堂は戸を閉ぢたまま、暫くの間ひつそりしてゐる。三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手の者の中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶ者がある。それに短い笑聲がまじる。

やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黑い角張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。律師は徐ろに口を開いた。騷がしい追手の者も、

纏つて（纏ひて）

戟

思うて（思ひて）

律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅隅まで聞えた。

「逃げた下人を搜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしにいはずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて三門を開けさせた。それになんぢや、御身が家の下人の詮議か。當山は敕願の寺院で、三門には敕額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。ここで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山

森鷗外

よう。（よく）
早う。（早く）
好からう。（好からん）
囁
繼いで。（繼ぎて）

東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこをよう思うて見て、早う引き取られたが好からう。悪いことはいはぬ。お身達の爲ぢや。

かういつて律師は靜かに戸を締めた。三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。然し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手の者どもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁き交してゐる。

この時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは十二三の小わつぱぢやらう。それならわしが知つてゐる」。三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見紛ふやうな親爺で、この寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いでいつた。

寢よう。（寢ん）
往つた。（往きたる）
聞いて。（聞きて）
田邊　今の京都府加佐郡舞鶴町。

「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、築土の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりに身が輕い。もう大分の道を行つたぢやらう。

「それぢや、半日に童の行く道は知れたものぢや。續け」といつて三郎は取つて返した。松明の行列が寺の門を出て、築土の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落ち著いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは姉の安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた追手が田邊まで往つて引き返した事

を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の鉢を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。後からは頭を剃りこくつて三衣を著た厨子王が附いて行く。二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處處の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け。父母の消息はきつと知れる」といひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事をいふ坊樣だと、厨子王は思つた。（森鷗外―鷗外全集）

錫杖

森鷗外　醫學博士、文學博士。名は林太郎。陸軍軍醫總監。島根縣の人。大正十一年歿す。（一八六二年―一九二五年）

新編中等國語讀本（新制版）卷三　終

字音假名遣一覽

假名	基本字	系統字	普通の假名
い			
キ	韋	偉緯	イ
	胃	渭蝟	
	惟	帷唯維	
	委	萎餧痿透	
	尉	慰	
	畏	位爲威遺彙	
キ	域	閾	イキ
ツキ	鶏		イツ
ン キ	員	隕殞韻	イン
	院		
右ノ外スキ・ツキ・ユキ・ルキノ音ハ皆キノ假名			
え			
エ	回	廻	エ
	會	繪	
	畫	惠慧衞穢	
イエ	衞		エイ
ツエ	越	鉞	エツ
ヱ	宛	婉蜿	
	蜿	豌怨苑鴛	
	猿	轅遠園	
	袁		
ン ヱ	援		エン
	渕	媛猨	
	圓	垣寃	
お			
ヲ	汙	汚	オ
	惡	嗚	
クヲ	屋		オク
ツヲ	腦		オツ
	越		
ヲ	温	慍	オン
	怨	褞	
	苑		
ン ヲ	遠		
	穩		
	園		
か			
ワ	化	花訛靴貨	カ
	禾	和科蝌	
	果	菓課夥顆裹	
	華	嘩譁	
	過	禍蝸窩	
	火		
	戈		
	瓦		
	臥		
	寡	畫	
イワ	獲	穫蠖鑊矍攫	カイ
	果	菓課夥顆裹	
	廓	郭	
	槨		
	怪	恠	海
	懷	壞	
	悔	晦誨	
	快		
	乖		
	潰		
	外		
クワ	回	徊廻蛔	カク
	會	檜獪膾繪鱠	
	塊	傀槐	
	灰	恢詼	
	恢		
	鬼	魁	
クワ	畫	劃	カク
	霍	擴馘幗	確鶴
ツク	滑	猾	カツ
	豁		割
ク	活	括刮闊	
	月		
ツク	官	棺館	カン
	宦		
	喚		
	換	煥	
た			
フタ	答	塔剳	タウ
	沓	踏	
	納	衲	
	楊		
ウト	東	凍棟	
	冬	疼蘢	
	豆	逗頭痘登燈磴鐙鬪	
	同	洞恫桐胴銅筒	
	童	僮撞幢憧瞳	
	動	慟働艟董	
	讀	瀆竇	
	桶	樋	
	藤	籐謄騰	
	投	等統透偸兜彤	
な			
フナ	納	衲	ナウ
ウノ	農	濃膿	
	能		
に			
フニ	入		ニウ
ウニ	柔	糅	
ゆニ	乳		
ウヨニ	女		ニャウ
ウネ	撓	繞饒遶	
	尿	溺	
ひ			
ウヘ	表	俵	ヒャウ
	票	漂標嫖縹剽瓢飄	
	苗	描猫廟	
	秒	渺	
	謬	繆	
	孕	厭雹廟豹	
ウヒ	氷	馮	
	凭	憑	
ほ			
ウホ	朋	崩硼繃鵬	ハウ
	某	謀	萌
	奉	俸棒	棒
	峰	烽蜂鋒逢縫蓬	
	封	幇	
	矛	袤	
	牟	眸	茅
	鳳	剖豐貿夢	
フホ	法		
フハ	法		
ゆ	乏		
み			
ウメ	苗	妙	ミャウ
も			
ウモ	蒙	濛朦艨矇	マウ
ゆ			
フイ	邑	悒	イウ
ウユ	熊	裕雄融	
勇			
よ			
ウヨ	用	甬涌蛹踊庸傭牖	ヤウ
	膺	鷹雍擁壅	
	容	溶鎔蓉熔	
	蠅		
	孕		
	癰		
フエ	曄	燁	
	葉	靨	
エ	遙	搖瑤徭謠	
	要		
	腰		
	饒		
こ			
フコ	劫	刦	カウ
	業		
ウク	黄	光	
	皇	恍洸晃幌	
	惶	廣曠鑛鑛曠	
	宏	紘	
	荒	慌	
	慌		
	閖		
	徨		
	煌		
	蝗		
	篁		
	遑		
	蠻		
	驀		
し			
フシ	習	摺慴褶	シウ
	揖	緝輯	
	拾	執集襲濕澁	
ウシ	宗	崇	
	終	螽	
	衆	聚	
せ			
フセ	小		シャウ
	少	哨	
	抄	鈔	
	肖	悄	
	消	銷	
	逍	峭	
	鞘		
	宵		
	霄		
	稍		
	涉	慴	
	慴	攝囁躡顳	
	捷		
	睫		
	葉	燮	
ウセ	召	紹詔昭照招沼韶	
	焦	蕉礁憔譙醮	
	蕭	簫嘯瀟	
	笑		
	燒		
	椒		
ち			
ウチ	松	訟頌鬆	シウ
	升	昇陞	
	從	慫樅縱蹤	
	衝	踵	
	腫	種鐘鍾	
	悚	竦	
	承	勝稱誦證	
	妾	接霎	
	捷	睫	
	直		
キチ	直		シキ
クチ	軸	舳	シク
	忸	竺釉	
ツユチ	怵		シュツ
	述		術
ヨチ	女		シヨ
	抒	除	如汝恕
	濁		序徐叙
クヨチ	濁		シヨク
ンチ	陣		シン
	沈		
	塵		
チ	治	地除膩	シ
	尼		寺侍
	持		時
	峙		
	痔		
	怩		
じ			
フジ	十	什汁	ジウ
	拾	澁	
ウジ	從	縱蹤	
	充	銃	
	戎	絨	
ウジ	丈	杖	ジャウ
	定	掟錠	
	嬢	釀	
	穣		襄壤穰
ウゼ	饒	繞遶	
	擾		
ウジ	丞	烝蒸拯	
	乘		
	剩		
	冗	繩茸	
ウユジ	頭		
	重	住	
クヨジ	濁		ジョク
ンジ	陣		ジン
	沈		
	塵		
ぢ			
ウヂ	怵		ジツ
	述		術
ヨヂ	女		ジヨ
	抒	除	如汝恕
	濁		序徐叙
クヂ	軸	舳	ジク
	忸	竺釉	
キヂ	直		ジキ
チヂ	治	地除膩	ジ
	尼		寺侍
	持		時
	峙		
	痔		
	怩		

監。島根縣の人。大正十一年歿す。(一五二五年—一五八二年)

新編中等國語讀本(新制版)卷三 終

こ

カウ
- フ 合 甲 岬 匣 胛 狎
- ウ 口 扣 叩 句(勾) 苟 拘 鉤(鈎)
- コ 后 垢 詬 逅 功 攻 虹 紅 肛 訌 汞 貢 鴻
- 工 江 巧 項
- 空 倥 控 腔 侯 候 喉 猴 洪 哄 閧 孔 構 溝 媾 購 篝 吼 講
- 槓 功 攻 虹 紅 肛 訌 汞 貢 鴻
- 亘 恒 姮 公 厚 後 弘 興 寇 肯 肱 薨

き

キャウ
- ウキ 共 供 拱 恭 蛬
- ウケ 凶 兇 匈 恟 洶 胸(胷)
- ウキ 恐 跫 葦 蛩 興 競 矜 凝 喝
- ケ 交 校 絞 皎 喬 蕎 僑 橋 嬌 嶠 憍 矯 轎 驕
- ウケ 教 孝 徼 竅 堯 僥 澆 曉 磽 驍 翹
- フ 夾 挾 狹 峽 鋏 頰 莢 篋 蛺 業 協 脇(脅) 劫 怯

キウ
- ウキ 及 吸 汲 級 笈 岌 給 翕 泣 急
- ウキ 弓 躬 窮 宮

か

カン
- ン 寛 款 關 鰥 盥 緩 頑 卷 桓 串 患 丸 紈 貫 慣 完 冠 浣
- ワ 環 還 寰 玩 頑 翫 灌 罐 鑵 懽 歡 觀 驩
- ク 喚 換 煥 官 宦 菅 管 棺 館

カツ
- ツ 活 括 刮 闊 滑 猾 月 豁

カク
- ク 郭 廓 槨 畫 劃 霍 擴 馘 幗 確 鶴

カイ
- ク 獲 穫 蠖 鑊 矍 攫 懷 悔 晦 誨 壞 快 乖 怪 恠 潰 外
- イ 回 徊 廻 蛔 會 檜 獪 膾 繪 鱠 塊 傀 槐 嵬 魁 灰 恢 詼
- ワ 禾 果 菓 課 夥 顆 裹 華 嘩 譁 過 渦 禍 蝸 窩 火 戈 瓜 瓦 臥 寡 畫

カ

お

アウ
- ア 押 鴨 凹
- オ 嘔 謳 歐 毆 甌 鷗 嫗 翁 甕 翁 翁 應 鷹
- ウ 王 汪 往 旺 枉 尨 皇 凰 黄 横 潢

オン
- ン 温 慍 褞 苑 怨 遠 園 穩

オツ
- ツ 越 膃

オク
- ク 屋

ち

チャウ
- フ 帖 貼 蝶 諜 牒
- ウ テ 兆 佻 挑 眺 跳 銚 窕 超 迢 貂 髫 朝 嘲 潮 鳥 蔦 凋 調 鯛 雕 彫 弔 釣 趙 肇 釐
- ウ チ 冢 塚 徵 懲 重 澄 寵

ち

チウ
- フチ 墊
- ウ チ 誅 蟲 偷 鍮 厨 蹰 中 仲 沖 忡 忠 衷 注 柱 註 駐

そ

サウ
- フ 雑 囃 匝 挿
- ウ ソ 宗 崇 淙 踪 綜 叟 搜 瘦 艘 曾 僧 増 憎 贈 繒 層 奏 湊 輳 匆 忽 惚 總 聰 嗽 漱 簇 嗾 藪 擻 宋 叢 走 送
- 嫂 窗(窓)

ず

ツイ
- ズ 隋 瑞 惴 隨 髓 蕊 蘂
- ス 受 手 壽 誦 從 數

ツ

じ

ジャウ
- フデ 帖 疊
- ウデ 溺 嫋 條 尿
- ウャチ 丈 杖 定 錠 掟 錠 嬢 醸 貞 娘 場 襄 壌 穰 譲
- ウゼ 饒 繞 遶 擾
- ウョジ 丞 烝 蒸 拯 乘 剩 冗 縄 茸

じ

ジウ
- ウュジ 從 縱 蹤 戎 充 銃 絨
- フジ 十 什 汁 拾 澁

じ

ジン
- ンチ 沈 陣 塵

ジョク
- クョチ 濁

ジヨ
- ヨチ 抒 女 除

ジュツ
- ツュチ 怵

ジク
- クチ 軸 舳 忸 竺 釉

ジキ
- キチ 直

ジ
- チ 持 峙 痔 尼 治 地 除 膩 寺 侍 時 恃

ゆ

ジウ
- ウュジ 頭 重 住

ゆ

イウ
- フイ 揖 邑 悒

ゆ

マウ
- ウモ 蒙 濛 朦 艨 矇

み

ミャウ
- ウメ 苗 妙

ほ

ハウ
- フハ 法 之 法
- フホ 法
- ホ 朋 某 崩 硼 繃 鵬 謀 奉 峰 俸 捧 蜂 烽 鋒 逢 縫 蓬 封 幇 矛 袤 牟 畔 鳳 剖 豊 貿 夢
- ウ 萌 棒 茅

ひ

ヒャウ
- ウヒ 氷 馮 憑(凭) 憑
- ウ 表 俵 票 漂 標 嫖 標 剽 瓢 飄 苗 描 猫 廟 秒 眇 渺 謬 繆 麩 雹 廟 豹 学
- ヘ

ゆ

ヤウ
- ウエ 用 俑 涌 蛹 踊 庸 傭 膺 容 溶 鎔 蓉 熔 遙 要 腰 耀 燿 窈 幼 夭 妖 殀 杳 姚 窯
- フエ 葉 曄 燁
- ウヨ 腫 鷹 雍 擁 壅 蠅 孕 癰

り

リャウ
- フレ 獵 鬣
- ウレ 僚 燎 瞭 遼 寮 療 了 料 寥 聊
- ウョリ 菱 凌 陵 稜 綾 龍

ゆり

リウ
- フリ 立 笠 粒 隆
- ウュリ 龍

ろ

ラウ
- フラ 蠟 臘 蠟 朧
- ウロ 瀧 壟 隴 朧 籠 聾 僂 螻 樓 縷 鏤 髏 弄 哢 陋 漏

○漢字の音も傳來の當初には支那音の通りに發音したが、時と共に變化して、今ではその假名遣も辭書に據るの他はなくなつた。

○然し數萬の漢字の音にも自ら系統がある。それを表にして記憶に便ならしめようとするのが本表の主旨である。

○假名欄は正しい假名遣を示す。

○基本字欄と系統字欄を分つたのは、一を知つて十を推さうとするのである。

○本表に示さない漢字の假名遣は、大抵末欄の普通の假名遣による。

○基本字に似て假名遣の異なる文字は大抵末欄の假名遣による。

昭和十二年五月八日印刷
昭和十二年五月十二日發行
昭和十二年十二月二十五日訂正印刷
昭和十二年十二月三十日訂正發行

新編中等國語讀本（新制版）

定價	
卷一、二各金六拾五錢	卷三、四各金六拾六錢
卷五、六各金六拾壹錢	卷七、八各金五拾六錢
卷九、十各金五拾貳錢	

編者　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷所　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
印刷者　細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社明治書院

不許複製